

特 100

470

Essence Series

作エメリメ

ンメルカ

譯江長田生



始



特100

470



エ
ッ
セ
ン
ス
セ
リ
ー
ス

10



エッセンス叢書發刊の趣旨

近頃一體に縮刷と云ふことが流行して参りました。結構な事でムいます。従前ならば大判で五冊も十冊もあつて、廣からぬ本棚に大きな場所を取り、またそれに相應するだけの高い價を拂はねばならなかつたものが、ちよいとポケットにも入れて歩けるやうになり、價も随つて格好になつて参りました。

結構は結構ですが、これだけではまだ、今日のやうに忙しい生活をしてゐる人々の、限りなき讀書慾を満足さす上に十分であるとは申されません。

なぞと云つて、今日の所謂縮刷は、容積と價格とだけの縮少であつて、實質的内容の上の縮少でない。原版の内容が十萬語あるものならば、縮刷版の内容もやはり十萬語はある。原版を通讀するに十時間かかる者ならば、縮刷版を通讀するにも同じやうに十時間かかる。否むしろ、文字が細くなつて讀みにくい場合など、十時間のものは十三時間十五時間もかかるかも知れないのであります。

乃ち、縮刷の次ぎに来るべき要求は、當然この「内容の縮刷」でなければなりません。十萬語のものは一萬語乃至五千語にも書き縮めて、十時間か、つた通讀を、一時間乃至半時間でも出来るやうにする。目の廻るほど忙しい人々へ、その人達の讀みたいと思ふ傑作名著を、純粹のエッセンスだけに煎じつめて供給する。これこそ今日の一般讀書界が痛切に要求してゐる本當の縮刷ではありますまいか。私共のこの「エッセンス叢書」は、何よりも先づこの要求に應じて計畫されたものであります。

ながながと效能を述べ立てるのも、お互に時間の浪費となりませう。この叢書が、如何に澤山の内容を煎じつめてゐるか、如何に高尚な思想を解り易く噛み砕いてゐるか、如何に廉價にしかも體裁よく世界的の大著作を提供してゐるかは、その一冊をでも御一瞥下さつた方には、直ぐに御分りになる事と信じます。

大正三年七月

青年學藝社同人

解 題

プロスパア・メリメエは一八〇三年、名聲ある畫家ジャン・レオン・メリメエの子として巴里に生れた。十八歳の時、父の希望に従つて、法律を學び、その研究を終るに共に、公職に就いて、その實力と友人の庇護とによつて、間もなく相當の地位に達した。

メリメエの第一の文學的勞作は、一八二二年に公にせられた「Le Théâtre de Clara Gazul」である。つづいて「La Guzla」を出した。この二篇は共に擬作で、第一のものは西班牙の小戯曲に擬したもので、彼は自らその翻譯者と名のつた。其の極端に簡潔な作風は、既に彼の特徴をよく現はしてゐる。第二のものは民話集に擬したもので、ゲエテの賞讃を博した。

一八二九年には、メリメエは「Mateo Falcone」L'Enlèvement de la Reçante」

の二短篇を公にした。續いて歴史小説 „Chronique du règne de Charles“ を出して、一般の注意を惹いた。その翌年には „Le Vase étrusque“ 一八三三年にはスタンダールの影響の明かに看取せられる心理小説 „La double Méprise“ を出した。一八三七年には „Colomba“ が出た。それはメリメエの最長篇(長篇と云つても四百枚足らずのものであるが)で、この作の爲めに彼は世界的の名聲を得た。

一八三〇年に既に彼は外務省の局長となつてゐた。一八四四年には學士院の員に擧げられた。それから第二帝政の下に、元老院議員になつた。こんな各種の官職を帯びてゐるにかかはらず、彼には尙多くの短篇の作がある。就中有名のは一八四五年に公にした „Carmen“ (譯者が茲に譯字逐を提供する所)である。曾てなしたる西班牙旅行が此作の動機となつたらしい。

晩年のメリメエは、スラヴ文學の研究に熱中し露西亞の詩人小説家の翻譯をさへ試みた。中でも彼が特別の尊敬を拂つてゐたのは、プウシユキンとゴオゴルとであつた。翻譯家以外に文學史家としても、メリメエは貢獻するところが多かつた。彼の最後の文學的勞作は一八六九年に著した „Lokis“ である。

外部から見たメリメエの一生は平穩無事で別に特筆すべきこともない。けれども彼は飽くまで懷疑家で、厭世家であつた。

彼の作品は文學上の名譽心のために書かれたものではない。彼は丁度爐邊に坐して、親しき人々に打とけて物語るやうにその作物を書いた。彼は單なる藝術家ではなくて、元老院議員であつたばかりでなく、尙考古學者、言語學者、美術批評家であつた。つまり彼の作品は世界的人物の閑餘のすさびなのである。

彼の短篇の主なるものには、尙 „Revue des deux Mondes“, „La Venus d'Ile“

„L'Abbe Aubain”等がある。メリメエは徹頭徹尾短篇作家である。

「カルメン」はメリメエの小説中最も興味あるもので、その「ユロムム」と共に世界的作品になつてゐる。

メリメエ作

カルメン

文學士 生田長江譯

エリメ
作 **カルメン**

生田長江譯

—

わたし
私はいつも、地理學者がムンダの古戰場をバストリ・ポエニの地方に、マルベイヤから
二三里北へ、今のモンダに近く置いたのを、出鱈目のやうに疑つてゐた。Bellum Hispani-
enseの匿名の著者の本文に關する、私自身の推測によつて、またオスナ侯の立派な圖書
館に蒐められたる報告によつて、私はかの、シイザアが共和政府の戰士に對して、最終の
勝負を争ふた記憶すべき所は、モンテイヤの近傍に捜されなければならぬと思つた。偶た
一八三〇年の秋の初めアングルツアに居つたので、かゝる疑問を解決すべく、随分大き
な遠足をして見た。思ふに、其内私の出版すべき小冊子は、總ての正直なる考古家の心に
何等の不確實をも残さないであらう。私の論説が遂に今日歐羅巴の學者界全體に決定され

ないであるところの地理上の問題を決定するまでに、私は一の手短かな物語を諸君に物語
つて見たい。それはムンダの實際の位置と云ふことに何の關係をも有しないのである。

私はコルドバで一人の案内者と二頭の馬とを備ひ、シイザアの「註釋」に一二枚のシャツ
の他何等の荷物も持たず出で立つた。一日私は、溶けた餡のやうな太陽に焼かれて、死ぬ
ほどに渴きを感じて、へとへとに疲れきつて、カチエナの平原のより高い部分を彷徨ひな
がら、心の奥底からしてシイザアやホムメイの子等を呪はしく思つてゐたとき、私の追ふ
てゐた徑から少しく離れて、蘆や葦の生茂つた小さな草原を自に留めた。それが泉の近く
にあることを知らせるやうに思はれた。果せるかな、近寄つて見ると、草原だと思つたの
が沼澤で、その間をうれうれと流れる水は、シエラ・ド・カブラの二の高い支脈にはさまれ
る狭い山峽から來るらしかつた。私はその流を溯つて行けば、水も冷くなり、水蛙や蛙も
少くない、絶壁の間に一寸した日蔭位見出されさうにも思つた。山峽へ乗り入れたとき、
私の馬が嘶いた。而して私に見えない他の馬が直に應じて嘶いた。辛うじて百歩ばかりも
進んだとき、山峽は俄に廣くなり、周圍の高い絶壁にすつかり覆はれたる、自らなる圓形

劇場の一種を展開した。旅人にとつてこれほど望ましき休息所はとても見出せないものだ
つた。垂直なる絶壁の下に、水がぶくぶくと湧いて出て、水のやうに白い砂を敷きつめた。
小さな凹みへ落ち込んだ。常に風を防がれ、泉の水を灌がれる五六本の立派な榭樹がその
縁に生えて、その厚い草蔭でそれを覆ふた。而して凹みの周圍には、柔かな豊かな草が、
十里四方のどの宿屋にも見出せないやうな、結構な床を供へてゐた。

斯くも悦ばしき休息所を發見したと云ふ名譽は、私のものにならなかつた。なぜならば
私の來たとき既に、一人の男がそこに休んでゐたからだ。馬の嘶きに呼び覺まされて彼は
起ち上り、自分の馬の方へ足を運んだ。その馬は主人の眠りを利用して、近所の草を存分
に食べて居た。彼は中脊の、こかし強さうな若者で、利かぬ氣らしい、凄味のある様子を
してゐた。かつて生々としてゐたかも知れないと思ふその顔色は、日にやけて髪の毛より
も黒くなつてゐた。彼は片手に馬の絆綱をとり、片手に眞鍮の喇叭銃を携へた。實を言ふ
と、最初彼の武器とその穩かならぬ様子とが聊か私を驚かした。けれども私はもはや盜賊
だと思はなかつた。なぜならば、私は随分盜賊の話が聞かされたのに係はらず、一度もそ

れに出會はなかつたからだ。加之、私は幾人もの正直な百姓が、公然に武装して市場へ出掛けるのを見たこと故、飛道具を有つてゐるからと云つて、その徳性を疑ふわけに行かなかつたのである。——「それに又」さ私は私自身に言つた、「私のシアツとエルセビル版の「註釋」とを何うすることが出来やうぞ？」で私は、その喇叭銃の所有者に馴々しく黙頭うなづいて挨拶をし、微笑しながら私が彼の眼をさまたげたかどうかを尋ねた。

彼は返辭をせずに、頭の頂邊あたまのつぺんから足のつまさきまで私を吟味した。やがてその吟味に満足したかの如く、同じ注目をそこへ来たところの私の案内者へふり向けた。私は案内者が眞青まっさまになり、恐怖を表はして立ちどまるのを見た。「碌ろくでもない奴やつに會つた！」と私は私自身に言つた。けれども細心が直ぐ何等の不安をも暴露しないやうにさ私に勤めた。私は馬を下りて、案内者に馬の銜くつわを外すやうに云ひつけた。而して泉の傍ひざまつに跪いて、頭と手とを水の中へ突込んだ。それから、ギデオンの放埒つぎこなる兵卒共の如く、腹這はよはいになりながらぐいぐいと呑んだ。

しかし私は、私の案内者とその見知らぬ男とから目を放さなかつた。案内者は、いやいやながら近寄つたが、その見知らぬ男は、私共に對して別に悪い目論見めくらみを有つてゐるやうに見えなかつた。なぜならば、彼は今一度その馬を手放し、また初めに水平に持つてゐた喇叭銃を、今地面の方へ向けたからである。

かくの如く私に對して拂はれた敬意の乏しさを怒るのが、不爲めのやうに思はれたので、私は草の上に寝そべつて、無頓着らしい調子で、彼が火打石と鋼とを持合せないかときいて見た。同時に私は巻煙草しがあを取り出した。その男は依然口を利かないので、ポケットを探り、火打石と鋼とを取出し、懇懇に私の爲めに火を打つた。明らかに彼は落付いて來た。なぜならば、私さ向ひ合つて腰を下ろしたからである。けれどもその武器を置くことをしなかつた。巻煙草しがあに火を點けたとき、私は残つた奴の中で一等善いものを選び出彼が喫煙するかどうかを尋ねた。

「喫のみます。Senor」と彼は答へた。

これが彼の口にした最初の言葉であつた。而して私は彼がアンダルシア風にSスを發音しないのに氣附いた。して見ると彼も私と同様(考古家でないけれど)旅人であつたなと推定

した。

「此方が好い」と私は言ながら、本物のハヅナ巻を彼にすすめた。

彼は心持頭をかしげながら、私の煙草で火を點けて、今一度黙頭いちどうなづいて私に謝した。それから非常に楽しさうな様子をして吹かし始めた。

「いや！」と彼は、口から鼻から最初の煙をゆるゆると出しながら叫んだ、「随分久しいものですよ、これを喫らないであたのも！」

西班牙では、煙草の遺取やとりが款待の關係を生じさせる。丁度東方の諸國で、パンと鹽とを分け合ふ場合と同様だ。私の相手は思つたよりも以上に口を利きだした。しかしながら、モンテイヤに住んでゐると言ふけれども、彼はその地方の事情にあまり通じてゐないらしかつた。彼は私共のゐた趣きのある谷間たにあひの名を知らなかつた。彼は附近のどの村の名をも擧げることが出来なかつた。而して前後に、あの邊で崩れかかつた城壁を、或は隅々のそりかへつた瓦かはらを、或は彫刻した石を見たかと聽かれたとき、彼は一向そんな物に注意したことがないを白狀した。埋合せうめあはに彼は、盛さかんに馬の知識を揮廻ふりまはした。彼は私の馬の缺點を指

摘した。それは格別むづかしい仕事でもなかつた。それから彼は自分の馬の素性すじやうをきかした。コルドバの有名な種馬たねうまから出来たので、まことに立派な代物しろもので、その主人に言はせると、一日に四十里も駈けさせたことがあるそうなる。御談義ごだんぎの半に、彼は突然中止した。言ひ過ぎしたと云ふことを驚き且つ恐れたかのやうに。

「いやれ、コルドバ急ぎの用事があつたで」と彼は狼狽ろうたへながら言葉を吐いた「訴訟事件で裁判官に請願しなければならぬ事があつたんですよ。」

言ひながら彼は私の案内者の顔を見た。案内者のアントニオはその目を落した。

涼しい蔭と泉とがあまりに嬉しかつたので、私はモンテヤの友人達が案内者の佩囊はいのうに入れて呉れた、上等のハムの片きれを想ひ出した。私は案内者にそれを取出させて、私の間食に附合ふことを今一人の男にすすめた。彼が久しい間煙草を喫まないのであつたらば、少くとも四十八時間位食べないであらうと思はれたのである。彼は飢ゑたる狼の如く貪り食つた。私はこの會合が彼にとつて天佑であつたと思はないであつた。私の案内者はその間僅かに食べ、より僅かに飲み全く話をしなかつた。その癖彼は旅行の最初から稀めじ

しい饒舌漢のやうに見えてゐたのだが、私共のお客様の前にゐると云ふことが、彼を惱ますらしかつた。而して何かの疑懼が彼等を距ててゐた。しかも私はその理由を洞察するこゝとが出来なかつた。

パンやハムの最後の屑が見えなくなつた。各自皆二本目の煙草をくゆらした。私は案内者に馬の絆綱を置くやう云ひ附けた。而して私の新しき友人に別を告げやうとしてゐたとき、彼は私が何處に夜を過すつもりであるかと尋ねた。

私は案内者からの相圖を氣附く前に、クエルヴォオの宿まで行くつもりだと答へた。

「貴方方には不自由な處だ。私もあすこまで行くんです。若し御差支なければお伴をさせて戴きませうよ。」

「それは好都合だ」と私は馬に乗りながら答へた。

私の燈をつかまへてゐた案内者は、今一度目示をした。私は肩を聳かしてそれに答へた。

私が全く無頓着だと云ふことを彼に信じさせるやうに。而して私共は出立した。

アントニオの妙な目示や、彼の明らかなる不安や、この見知らぬ男の口を漏れたことの

言葉や、さり分けその四十里をも駈けさせたといふことや、それに對する彼の甚だ怪しげなる辯解が、私共の道連に關する私の意見を己に拵へてゐた。私は烏散な奴と、恐らくは路盜と關係つてゐることは疑はなかつた。しかしそれが私にさつて何であらう？ 私は西班牙人の性質を十分に呑込んでゐたので、私と一緒にパンを割き煙草を喫んだ奴を、恐れるに及べぬと高を擡ることが出来た。彼がそばについてゐると云ふその事が、面白からぬ遭遇に對する保障であつた。加之、私は盜賊さういふものがどんな様子をしてゐるかを知りたくもあつた。人は毎日彼等を見るものでない。而して危険な人物の間に入つてゐるのは面白い。とりわけそれがおとなしく馴々しくしてゐる場合に於てさうだ。

私はその男をして、だんだんと私に氣を許させるやうにしようと思つた。而して案内者の目示するにかかはらず、會話の題目を路盜の上にむけた。私が大なる敬意を拂つて彼等を口にしたことは言までもない。その頃アンダルシアにはホセ・マリアといふ有名な盜賊があつた。その話は總ての口の上つてゐた。

「私がホセ・マリアと馬を井べてゐたならば！」と私は私自身に言つた。

私はその主人公に關して知つてゐるやうな物語をした——萬事彼に好都合のやうに——
而して私は熱心な言葉で以て、彼の任侠に對する私の嘆美を表白した。

「ホセ・マリアはただの悪黨ですよ」とその男は冷かに言つた。

「彼は彼自身を公平に評してゐるのか？」と私は考へた。「それともこれは單に彼の側で大
袈裟に謙遜してゐるのか？」なぜならば、私は私の伴侶を親しく觀察することによつてア
ンダルシアの多くの町の門に貼り出されたる、ホセ・マリアの人相書を彼に當てはめるの
に成功したからだ。

「然うだ、確かに此男だ。アロンドの髪で、青い目で、大きな口で、奇麗な齒で、細い手
で、麻布のシャツに、金のボタンをついた天鵞絨のジャケットに、白い革の脚絆に、栗毛の
馬だ。何等の疑ふべき餘地もない。しかし私は匿名家を尊敬して置かう。」

私共は例の宿へ着いた。それは彼が言つたやうな處、即ち私のこれまでに見た最もむさ
くろしい旅籠屋の一であつた。一の大きな室が庖厨ともなり、食堂ともなり、寢室ともな
つてゐた。火が室の中央の平たい石の上に焚かれた。煙が屋根の孔からぬけて出た。或は

むしろその邊りで立ち迷ふた——床から數尺のところ濃い雲を作りながら。壁に沿うた
地面の上には五六枚のすりきれた綿入の毛布が伸べられた。それは御客様の寢床であつた。
家から、或は寧ろ右に述べた一室から、二十ヤードばかり離れて一種の小舎があり、既に
して役立つた。此面白い住居の中には、少くともそのとき、一人のお婆さんと十歳ばかり
の小娘との他誰もゐなかつた。その二人は煤のやうに黒く、ひどい襤褸にくるまつてゐた。
「見よ」と私は私自身に言つた。「昔のムンダ・ポエティカの住民の名残をとどめる總ての
ものを おおシムザアよ！ おおセクストゥス・ポムメイよ！ もし汝等が生き返つて
見たならば、如何に描くことであらうぞ！」

私の伴侶の姿を見て、お婆さんは驚きの叫びを發した。

「や！ ドン・ホセさんかな！」と彼女は叫んだ。

ドン・ホセは額を皺めて、嚴かな身振で手を舉げた。それが立處にお婆さんを黙らせた。
私は案内者へふりむいた。而して氣附かれないほどの相圖で、私が一緒に夜を明さうとし
てゐる人間に就いて何も心配するに及ばないと云ふことを悟らせた。

晚餐は思つたよりも御馳走であつた。高さ一尺ばかりの食卓で、共は米と澤山の胡椒まで料理された牝鶏を食はされ、それから油でいつた胡椒を食はされ、最後に一種の胡椒のサラダを食はされた。斯様に味の強い三皿は、私共をして度々モンテイヤのない酒の囊へ手を伸べしめた。食事を濟ませたあとで偶然壁にかけたるマンドリンが目についたので——西班牙では到處にマンドリンがある——私は給侍をしてゐた小娘に、それをひくかときいて見た。

「いいえ」さ彼女は答へた。「でも、ドン・ホセさんは随分上手に弾きます！」

「一つ御願だ」と私は彼に言つた。「何かきかして貰ひたい。私は恐ろしく此國の音楽が好きなんだから。」

「私はあんな上等の煙草をくれた、氣前のいい紳士の求を斥けることが出来ない」とドン・ホセは機嫌よく言つた。

而してマンドリンを取りよせて、彼は自分で弾きながら歌つた。彼の聲は荒いけれどもまことに心持のいい聲で、調子は陰鬱な神秘なものだつた。その言葉に至つては、一緩音

も私には分らなかつた。

「若し私の推測が間違はないならば」と私は言つた。「それは西班牙の曲でない。それは私がプロオヴンスで聞いたソルセコスに似てゐる。言葉はバスケに相違ない。」

「さうです」とドン・ホセは陰氣な調子が答へた。

彼はマンドリンを床に置き、腕組みをして、妙に憂鬱な表情で消えかかる火を見守りながら坐つてゐた。氣高く且つ暴烈な彼の顔は、低い卓の上に立つラムプの光に照らされて、ミルトンの魔王を想起させた。恐らくは彼もあの魔王と同じく、彼の棄てた安息所や、彼の招いた刑罰を思つてゐたのであらう、私は會話を回復しようを試みたけれど、彼はその悲しげな物思に耽つてゐて、それに合榘を打たなかつた。お婆さんは已に、索で吊された毛のきれた古毛布の背後へ、室の片隅へ退いた。小娘は女共にあてがはれたる、その隠所へお婆さんに従つた。そのとき私の案内者は起ち上つて、私を厩へまで連れ出さうとした。けれどもその相圖を見て、ドン・ホセは、不意に目が覺めたかのやうに、言葉荒く、彼が何處へ行くかを尋れた。

「厩へ」と案内者は答へた。

「なににしに？ 馬の食^たべるものはあるよ。ねるがいい。旦那も御異存はなからうから」

「私は旦那の馬の加減が悪いんぢやないかと氣になるんだ。私は旦那に行つて見て頂きたい。旦那にはどうしたらいいか、御分りだらうから。」

アントニオがこつそり私に話したいと思つたのは明白であつた。けれども私はドン・ホセに疑心を起させたくなかつた。而してそのとき私共の立つてゐる立場を考へると、出来る丈の信頼を見せるのが上策のやうに思はれた。そこで私はアントニオに、馬のとはなんにも分らないと言ひ、また眼^{ねむ}くなつてゐると言つた。ドン・ホセは彼と一緒に厩へ行くまもなくひとりで歸つて來た。後になんにも馬に別條のないことを言つた。けれども私の案内者はそれをひどく大事がつて、自分のシャツでその汗を拭つてやり、また夜通しその仕事をやるやうに言つたさうな。その間私は毛布の上になれそべつた。それとちかちかに接觸しない爲め、用心深く私の上衣^{うはぎ}にくるまりながら。私の傍に場所を占めることの無體を謝したあとで、ドン・ホセは戸の前に横つた。しかし、彼の喇叭銃に門藥^{くらんすずり}をつめかへることを忘れ

なかつた。その銃は彼が枕代りにしたところ佩囊の下に置かれた。私共がお休みなさいと言ひ合つたあと、五分間すると共にねついで了^{しま}つた。

私はこんな寢床の上にさへ眼れるほどに勞れきつてゐると信じてゐた。けれども一時間ばかりもたつたあさ、非常に不愉快な痒さが第一の微睡^{まどろみ}から私をさました。その痒さの性質を思ひ浮べるや否や、私はこんな有りがたくない屋根の下よりも、戸外^{こゝろ}に夜を明^{あか}す方がましと思つて起ち上つた。私は爪立^{つまたて}ちしながら戸口へ歩いて、正^{ただ}しき人の眠^{ねむ}りを眠つてゐるドン・ホセを踏み越えた。而して彼の目をさまさないでその家をぬけたほどに氣をつけた戸口に近く一の大きな木造の腰掛臺があつた。私はその上に横になつた。而して出来る丈^{らく}に樂々その夜を過さうとした。二度目に私が目をつむろうとしてゐたとき、私は一人^{ひとり}の人間と一頭^{いっぴき}の馬の影とが、少しの音をも立てず、私の前を通り過ぎるのを見たやうに思つた。私は起き直つた。而してアントニオの姿を認めたと思つた。夜^{よる}のさういふ時刻に厩の外で彼を見出したのを驚いて、私は起^{わた}つて彼の方へ歩み寄つた。彼は始めて私を見て立ちとまつた。

「あれは何處にゐます？」と彼は小聲にきいた。「家の中に。れてるんだ。蚤が恐しくない
と見える、お前は何だつてその馬をつれて行くんだ？」

私はそのとき、アントコオが小舎を去るのに何の音をも立てぬ爲め、馬の足を用心深く
古毛布で包でゐるのを氣附いた。

「小さい聲で仰しやつて下さい、後生ですから！」とアントニオが言った。「貴方はあれが
何者なのかを御存知ありませんか？ あれはホセ・ナバロで、アングルシアの音に聞えた悪
黨でムいます。私は終日相圖をしました、貴方は呑込まうとなさいませんでした。」

「悪黨だつて何んだつて構ふものかね。」と私は言った。「何も我々の物を取つたんぢやな
い。大丈夫そんな事をしさうぢやないよ。」

「それはさうですね！ けども、あいつを密告するものには二百デユカットの賞與が下り
ます。ここから二里ばかりの處には、槍騎兵の一支隊が陣取つてゐます。で、私は夜の明
ける前にあいつを取り押へる爲めに、きつい奴を四五人ばかり連れて來ませう。私はあ
いつの馬を連れて行きたいけれど、なかなかきかない奴で、ナバロより他の者の手には合ひ

ません。」

「ひどい事を言ふぢやないか！」と私は言った。あの男がお前をどんな目に遣はせたと云
ふので、お前はあの男を密告するのか？ それにだ、お前の言ふ通りの盜賊であると云ふ
ことが確實かい？」

「それはもう確實ですとも、あいつさつきも厩まで私について來て斯う言ふんです、「お前
は俺を知つてるやうな素振を見せる。第一お前があの旦那に、俺の誰だかさ云ふことを言
ひつけてもすると、お前の首はないものと思へ！」御残りなさいませ、旦那はあいつと御
残りなさいませ。貴方は何も御心配に及びません、貴方がここにゐらつしやると知る限り
あいつ何の疑もかけないであらせうから。」

私共は話をしながらだんだん宿を遠かつたので、馬の靴音が聞えなくなつてゐた。アン
トニオは手早く、それを包んだ襦袢をとりはづして乗る身仕度をした。私は威したりすか
したりして彼を思止ませやうと試みた。

「私は貧乏人でムいます、旦那様」と彼が言った、「二百デユカットの金は棄てて置かれま

せん。別してそれがあんな悪蟲のやうな奴を退治たいぢることが問題になつてゐます場合には、しかし、氣を御附けなさいませ！ ナパロが目をさませば、あいついきなりその喇叭銃にさびついて、貴方を探すてういませう！ 私はもう、ここまで来たからには引返されません。精一杯氣を御附けなさいませ。

案内者の奴は既に鞍の上うへにゐた。彼は兩足りやうあしで馬に拍車をあてた。而してまもなく暗闇くらやみの中へかくれてしまつた。

私は案内者をひごく腹立はらたたしく思つた。而し甚だ不安な心持になつた。一寸考へたあとで、私は如何にすべきかを決定して、宿の方へ引返した。ドン・ホセはやはり眠つてゐた。疑もなく危あぶない數日間の疲勞と不眠との補ひをしてゐたのであらう。私は彼を目覺ます爲めに、荒々しく彼を揺ゆらなければならなかつた。私は彼の恐らしい目と、その喇叭銃をつかまうとしたときの動作どうさとを忘れることが出来ないであらう。その喇叭銃は用心の爲め、私が彼の寢床から稍や離れた場所へ置いたのであつた。

「濟まなかつた」と私は言つた。「お前さんがよくれてゐるのを起して。ところで私は、馬

鹿々々しい事を尋ねなくちやならない——お前さんは此戸口へ五六人の槍騎兵が駈けつづけるのを見たら、あんまりいい氣持でもあるまいね？」

彼はすつくと起ち上つて、恐ろしい聲できいた——

「誰だれが貴方に言ひつけた？」

「その警告けいこくがどこから来るかはどうでもいい、確かなものでさへあるならば。」

「案内者が言ひつけたんでせう。しかしあの野郎、それ丈けの價を拂はさないで置くものですか！ 何處どこにあるんです？」

「私は知らないが、厩うまやにあるんだらうよ。——しかし私に言つてきかしたのは——」

「言つてきかしたのは誰だれです？ まさか婆さんではありませんまい。」

「私の知らない或る人が。——しかしその上の詮議は措おいて、お前さんはちつきして兵隊共を待つてゐられない事情が、あるのかなのか？ もしあればぐづぐづせぬがよい。もしなければ休みなさい。而してお前さんの眠をさまたげたことをお詫びしなくちやならない。」

「畜生！案内者の奴め！始めから怪しいと思つてゐたんだ。しかし——あいつの勘定は拂はしてやる！左様なら、御機嫌よう！貴方の御好意は忘れませんよ。私はまつたく貴方方の御考へになつてゐるほどの悪黨でもありません。さうです、私の心の中にはまだく立派な人の同情を値するものが残つてゐます。——左様なら、御機嫌よう！私はたゞ残念なことがある。外でもない、私はあなたの御恩に報いることが出来ません。」

「私の盡したことに報いるのには、ドン・ホセ、何人をも疑はないと復讐を考へないと約束してくれ。さあこの煙草を御取り、而して無事に道中をするんだよ！」

斯う言つて私は彼に手をさしのべた。

彼は返事をせずそれを握つた。而してその喇叭銃を佩帯とを取り、お婆さんと私に分らない諸説で戯語を交へたあと、彼は小舎の方へ駆け出した。数瞬の後、私は彼が馬を飛ばして去るのをきいた。

私は再び腰掛臺の上に横つたけれど、もはや眠れなかつた。私は路盗を、恐らくは殺人者を、單にハムと鶏飯とを一緒に食べたさ云ふ丈で、絞首臺から救つてやつたのは善事であつたかどうかを怪んだ。私はかの法律の要求を支持するところの、私の案内者を裏切りしなかつたか？ 私は悪漢の復讐に彼を暴露しなかつたか？ しかしながら款待の義務が——「残忍なる人間の先入見よ！」と私は私自身に言つた。「私はあの悪漢の犯すべき總ての罪惡に對して責任を負はなければなるまい。」——しかしながら、結局あれが眞に先入見なのであらうか、すべての議論を容れないところのあの本然の性能が？ 恐らくは私のあた如き複雑な境遇にゐては、どちらにしても後悔を残さず處置することが出来なかつたのである。私は五六人の騎兵がアントニオと一緒に近づいて来るのを見て、尙ほ依然として私の行爲の是非を思案してゐた。アントニオは用心深く後衛に止まつてゐた。私は彼等を迎へながら、盜賊が二時間も前に逃げ去つたことを告げた。お婆さんは役人から詰問されて、彼女がナバロを知つてゐたといふこと、けれどもああしてたゞ一人ゐるので、生命を賭して密告する氣にもなれなかつたといふことを申し立てた。彼女はそれに附加へて、彼がやつて来る場合には、いつも夜中に立去る習慣であつたを告げた。私自身はと云ふと數里を距てた處へ行き、私の旅行券を示し、役人の前に始末書に記名調印しなければならな

つた。而してそのあとで私の考古的研究を繼續することを許された。アントニオは、私が彼の二百デユカットの儲けを邪覓したと疑つて私を怒つた。けれども私共はコルドバで仲よく別れた。そこで私は私の財政状態の許す限り心附けを彼にやつたのである。

二

私はヨルドバで數日を過した。私はドミニカン派の僧院の圖書館にある書物が、古代ムンダに關する價值のある報告を供給しさうだといふことを告げられた。その善良なる教父達に甚だ懇切なる待遇を受けながら、私は右の僧院に逗留してゐて、夕方になると町の中を歩き廻つた。いつも日没頃になると、怠惰者の群がヨルドバのグアダルキビールの右岸を縁取る埠頭の上にあつた。そこには製革所からの臭氣が漂ふて、革の名産地としての昔の名残を今も尙ほ留めてゐる。しかし一方では面白い光景を賞することも出来る。アンセラスの鐘の鳴る數分時間前に、多數の婦人共が高い埠頭の下に、川の岸に集まつて来る。一人の男子もその群に加はることを致してせぬ。アンセラスの鐘が鳴り渡るや否や、それが

暗くなるものと想像される。鐘の鳴り止むと共に、それらの婦人共は悉く着物を脱いで水中へ入る。そのさき大きな叫び聲や、笑や、物凄いな咆哮が起る。上の埠頭からは男子等が目を見張つて沐浴者を注視するけれども、あまり善く見えない。しかしながら川の暗青に對して輪廓を描かれる朦朧たる青い形は、詩的の心を動かす。而してほんの僅かの想像さへあれば、アクタエオンの運命を恐れるの必要なく、ティアナとそのニムフとの沐浴してゐる幻影を拵へ上げるのは困難でない。私が聞いたのに、一日幾人かの道樂者等は、寺の鐘撞番に贈賄して定時より二十分前にアンセラスを鳴らさせやうと謀つたそうだ。よしまだ眞晝間であらうとも、グアダルキビールのニムフ等は躊躇しなかつた。而して太陽よりもアンセラスを信用しながら、憚りもなくその沐浴の支度をしたといふ。私はその時そこになかつた。私の行つた時分には鐘撞番が腐敗されがたく、薄明が餘程暗くなつて居た。而して猫でもなければ、橙賣の婆さんとコルドバの最も美しい茶屋女を區別することが出来なかつた。

一夕もう何物も見えない位暗くなつてゐたとき、私は埠頭の胸壁にもたれて煙草を喫ん

でゐた。そこへ一人の女が河につゞく階段を登つて来て、私の傍へ腰をかけた。彼女は髪の毛に大きな素馨の花をつけてゐた。夜分人を酔はすやうな匂を放つ花である。彼女は質素な、恐らくはみすぼらしげな風で、夕方の多くの茶屋女なその如くすつかり黒く装はれてゐた。流行社會の婦人は朝の中だけ黒い着物をきる。晚になれば佛蘭西風の扮装になるのである。彼女は私の傍へ来たとき、その頭を蔽ふてゐたゼエルをその肩の上に落した。而して私は「星より落つる朧なる光によりて」彼女が若く、小柄で、姿のいいと云ふことをまた彼女が非常に大きな目を有つてゐると云ふことを知つた。私は直ちに私の煙草をなげ棄てた。彼女は此佛蘭西風の禮儀を氣附いて、忙しく彼女が煙草の匂をひどく好きだと云ふことを言つた。實は極々柔かな紙巻にぶつつかつたときなど、自分でも喫む位だと言つた。た合せと私はさう云ふ種類のを何本か煙草入の中に有つてゐた。而して直ぐにそれを彼女にすすめた。彼女はその一を取つて呉れて、一人の子供が小さな銅貨一で持つて来てくれるところの火索の片で火を點けた。私共は煙を交へながら随分長い間話してゐたので、遂には私と奇麗な沐浴者との他、殆んど誰も埠頭の上になくなつてしまつた。私は大丈夫彼

女をカップフェエへ氷を飲み連れ込むことが出来ると思つた。遠慮深く躊躇したあとで彼女は承知した。けれどもさうする前に彼女は、何時頃であるかを知りたいと言つた。私は懐中時計を打たせて見た(前の、時を打つて知らせる時計)。その時を打つのが少からず彼女を驚かすやうに見えた。

「貴方方外國の方は、何さ云ふ珍らしい物を發明なさるんでせう! 貴方の御國は? きつと、英吉利でせう?」

「佛蘭西です。而して御嬢さん——ですか奥さんですか、貴方は多分、もとかからコルドバの方でせうね?」

「いいえ。」

「少くともアンダルシアの方でせう。貴方の穩かな御話振りでそれが分るやうに思はれますよ。」

「もし貴方が、そんなにまでよく言葉辯を御氣附きでしたらば、私が何う云ふ人間なのかきつと御分りになりますせう。」

「私はあなたが、天國から二歩手前、耶蘇の國の方だと思ひます。」

(私はアンダルシアを表示する此比喻を、私の友人で有名なる闘牛士のフランシスコ・セビイヤから教はつた。)

「まあ！ 天國ですさ——此邊の人達に言はせると、それは私共の爲めに作られたものではないさうです。」

「では、貴方はきつとムウル婦人が、それとも——」

「私は私自身を喰ひ止めた、流石に「猶太婦人」とも言ひ兼ねたので。」

「なあに！ 御覽の通り私はシプシイなんです。貴方の御運星を占はして頂きませうか。」

カルメンシタの事を御聞及びはういませんでしたか？ あれが私なのですよ。」

私はその頃——十五年前——随分なふしだら者であつたから、自ら女巫の側に坐つてゐると知つても、別に無氣味に思はなかつた。

「馬鹿にしてゐる！」と私は私自身に言つた。「先週は路盜と一緒に食事をしたが、今日は悪魔の侍女と氷を食べるんだ。旅をするといろんな物を見なければならぬわい。」

私は彼女と知合になる爲めの今一の動機をもつてゐた。私は學校を出た後、耻をも構はず白狀するが、少時の間煉金術の研究をやつて見た。而して幾度か悪魔を呼び寄せることを試みたのである。斯うした研究に對する私の病辭を癒されてからすつと後までも、私はやはりいろんな迷信に關する若干の好奇心を存してゐた。それ故私は魔法の技術がシプシイの間にどれ位行はれてゐるかをこの見込みを悦んだ。

一緒に話しながら私共はカツフェエへ入つて、玻璃の圓火筒をかけた蠟燭に照らされてゐる、小さな卓に着いた。そこに氷を食べてゐたさまざまの紳士淑女等が、私の妙な伴侶を見てあつげに取られてゐるとき、私は私のシプシイを吟味すべき澤山の機會を有した。

私は眞面目に、カルメン嬢が純粹のシプシイ種であつたかどうか疑ふ。兎もあれ、彼女は私がこれまでに見たどのシプシイよりも比較にならぬほど美しかった。西班牙人に言はせると、如何なる婦人でも、三十個の形容詞があてはまらなければ、換言すれば十個の形容詞が各身體の三部分に適用されるのでなければ美しくない。例へば、彼女は三の黒い物を有たなければならぬ——目と、目毛と、眉と。(その他の事はプラントオムを見るがよい)

私のジプシイはさうまで完全な資格をもつてゐなかつた。彼女の皮膚はよことに滑らかであるけれど、銅の色に酷似してゐた。彼女の目は斜になつた、しかし美しい形のものだつた。彼女の唇は少し厚いけれど格好よく出来てゐて、皮をむいた巴旦杏よりも白い二列の齒を露はした。心持荒いかと思はれる髪の毛は烏の羽のやうに背く反映するところの黒さで、長く且つ澤かであつた。長たらしい文句で讀者諸君を勞らすことを避けて、私は彼女が、各の短所に對して何かの長所を持つてゐて、しかもコントラストによつていよいよそれを引立たせてゐると言ひたい。それは不思議な、野蠻な美しさのタイプであつた。初めは人を驚かすところの、しかも人の忘れることの出来ないやうな顔であつた。とり分け彼女の目には淫縱にして且つ激烈なる表情があつた。私はその後何人の目にもあんなのを見たことがない。「ジプシイの目は狼の目だ」云ふのは、鋭い觀察を示すところの西班牙の諺である。若し諸君にしてシャルダン・デ・プラトへ來て狼の目付きを研究する時がないならば雀をわらつてゐるさきの猫を觀察して御覽なさい。

勿論、カツフェエで運星を占はせるのは當を得ない事だと思はれた。そこで私は、美人

の魔法使に、その家までついて行くことを許してくれるやうに求めた。彼女は直ちに承諾した。けれども今一度何時頃であるかを知りたがつた。而して再び私の時計を鳴らすやうにと求めた。

「純金でムいますか？」と彼女は異常なる注意を以てそれを見ながら尋れた。

私共がカツフェエを出たときは、もうすつかり暗くなつてゐた。大抵の店はとざされ、街には殆んど人通りがなかつた。私共はグアグルキピイルに架けた橋を渡り、市外の端へ來て宮殿に似てもつかない家の前に立ちとまつた。一人の子供が私共を入れてくれた。ジプシイの女は私に全く分らない言葉で何事かを彼に語つた。それはあとで Romani 又は chipo cili と云ふジプシイの言葉であつたと知つた。子供は大きな二室へ私共を導いてから直に姿を隠した。その室には小さな一の卓と、二の腰掛と、一の箱とがあつた。私は一の水瓶と、橙の堆積と、一束の葱とを擧げること忘れてはならぬ。

私共二人だけになるや否や、ジプシイは、餘程手擦れたらしい一組のカアドと、一の磁石と、干物の蠍と、井びにその技術に缺くべからざる他の品物の若干を箱から取り出

した。それから彼女は私をして、左の手に貨幣を持って十字をきらした。而して魔法の式は始まつた。彼女の預言を繰返すのは用もないことである。運算の方法に就いて云へば、彼女は本物の女巫になつてゐなかつた。

不幸にして、私共は間もなく中絶された。戸が不意に荒々しく開かれて、褐色の外套に目まで包まれた一人の男が入つて来て、亂暴な調子でツプシイに言葉をかけた。私は何を彼が言つたかを了解しなかつた。けれども彼の調子彼が甚だ温厚ならざることを示した。彼の姿を見てツプシイの女は驚きをも怒りをも見せないで、彼を迎へるべく駆け寄つた。而して恐しき早口で、彼女が己に私の前に用ひたところの不思議な舌で何事をか語つた。幾度か反復されたる *Pavlio* と云ふ言葉が、私の理解したる唯一の言葉であつた。私はツプシイ共が彼等の種族以外の總ての人間を斯く言つたのであることを知つた。自分が話の題目になつてゐることを推定したので、私は更に複雑な説明を待ち設けた。私は己に腰掛の一に手を置いて、それを如何なる刹那に、あの侵入者に投げつけるべきかを考へてゐたけれども彼は荒々しくツプシイを押しつけた。而して私の方へ歩み寄つた。それから一步

だちろぎながら叫んだ――

「いやこれは！ 貴方ですか？」

私はよく彼を見た。而して私の友人なるドン・ホセであることを認めた。その刹那私は、私が彼に絞刑を免れしめたことを残念だと思つた。

「やあ お前さんか」と心から笑へる丈け笑ひながら私は叫んだ。「お前さんは、あの婦人が私に大層面白い事を告げてくれる處を邪魔したんだね。」

「いつも同じ事をやつてる！ 止めなくちやいけない」と彼は酷らしく若い女を見守りながら齒の間につぶやいた。

その間彼女は彼女自身の言語に於て彼に話しつつづけてゐた。彼女はだんだんと激して来た。その目は血走つて恐ろしい目になり、その頬はひきつつかうになり、而して彼女は床の上を踏み鳴らした。彼女は彼が躊躇したらしいある事を熱心に勸めてゐるらしく見えた。そのある事が何であるかは、彼女がその小さな手を顎の下に叩きつけるのを見たとき分り過ぎるほどに分つたと思つた。私はそれが咽喉を切ることでであると信じたかつた。而

して私は問題になつてゐる咽喉が私のではないかとの疑を挾んだ。

斯うした雄辯の奔流に對して、ドン・ホセはただ鋭い調子によつて發せられる二三語によつてのみ答へた。これに對してツプシイは、極端なる侮蔑の警視を彼に與へた。それから室の隅に土耳其風に腰を下ろして、一の橙を取り出してその皮をむいて、それを食べ始めた。

ドン・ホセは私の腕を掴んで、戸をあけて私を街へつれ出した。私共は全然無言のまま、二百ヤアドばかりも歩つた。それから彼は手を差し伸べながら言つた――

「ずんずんと向ふへゐらつしやい。さうすれば橋へ出るから。」

さう言ひ置いて彼は私の方に脊をむけ、すたすたと驅け出した。私はむしろ意氣地なく而して不愉快を感じながら宿へ歸つて來た。それに最も善くない事には、着物を脱いで見たさき、私の時計がなくなつてゐた。

翌日それを取返しに行くことから、或は私の爲めに取返して貰ふ爲めお役所へ訴へ出ることから、種々なる思慮が私を引きさめた。私はドミニカン派の僧院にゐて、私の書物を

なし了へて、セビエユへむけて去つた。數ヶ月間アンダルシアをぶらつき廻つたあと、私は馬德里へ引返さうと決心した。而して今一度コルドバを通過することが必要であつた。私はそこに長く逗留しやうと思はなかつた。なぜならば、あの美しい市とグアダルキビールの沐浴者とに對して、激烈なる嫌惡の情を抱いてゐたからだ。しかしながら、少しばかりの用達と、訪問さるべき二三の友人とが、ミユスルマン諸公の舊都に少くとも三四日の間私を引き留めさうと思はれた。

私がドミニカン派の僧院に現はれたとき、ムンダの位置に關する私の研究に大なる興味を有つて現れた神父の一人が、その手を開いて私を迎へた。

「これは有難い！」と彼が呼んだ。「ようこそ歸つて來ました！ 私達はみんなもう貴方をなくなつたものと信じてゐた。而して今貴方に物を言つてゐる此私か、貴方の冥福を祈る爲めに幾度か祈を上げたものです。では、貴方は殺されなかつたのか？――なぜと云つて私達は貴方が路盜に遭つたのを知つてゐるんです。」

「それはまたどうして？」と私は少からず驚いてきいた。

「どうしてと云つて、あの綺麗な懐中時計——図書館の中で私達がもう勤行へ出掛けなければと言ふとき、いつも貴方が打たせて見たあの時計です。どうです！ あれが取り返されたんです。いづれ貴方へ下渡しになるでせう。」

「あれはその」私には稍やまごつて遮ぎつた。「あれをなくしたのは——」

「泥棒は檻の中へ入つてゐます。そしてあいつ一錢を獲る爲めにも、基督者に發砲する奴だと聞いたので、きつと貴方もやられたに違ひないと思つたのです。私は貴方と一緒にお役人の處へ行つて、あの綺麗な時計を取り返して來ませう。ですから、正義の太陽が西班牙を照らさないものと御考へになつては困りますよ！」

「正直なところ」と私は言つた。「私は法廷に證人に出て可哀相な奴を絞首臺へ送るよりも、あの時計をなくしてしまふ方がいい。それも他のわけではなく、特にその——」

「いや！ その邊の御心配は御無用です。あいつ申分のない罪狀が上つてゐる。そして二度と首を吊るされるわけのものではない。首を吊るされると云ふのは間違ひです。あいつ下級貴族ですから、明後日相違なく首環を締められるんでせう。だから、竊盜の一件位多

くなつても少くなつても、その運命に動搖はないんです。ああ、あれが唯だ盗む丈けのとてあつたなら！ しかしあいつは幾度となく人殺をやつてゐる、あとからだんだんと兇悪なやつを。」

「そいつの名は何と云ふんです？」

「ホセ・ナバロの名で此地方全體に通つてゐるが、私や貴方などに發音の出來ないやうな、他のバスケ語の名前をも有つてゐる。でもあいつは、見る丈の價値のある男だ、それに此地方のいろんな特質に興味を有つ貴方としては、西班牙の悪黨がどうして此世を去るかを知るべき機會を、閑却することも出來ますまい。禮拜堂で執行になるんです。而して神父のマルテネスが貴方をつれて行つてくれるでせう。」

ドミニカン派の僧が、その面白い處刑の仕度を見なければならぬとあまり熱心に言張つたので、私はそれを拒絶しかれた。私は先づ巻煙草を携へて囚人を見に行つた。それが彼をして私の秘密漏洩を恕さしめるであらうと思つたのである。

私がドン・ホセの前に連れて行かれたとき、彼は物を食べてゐた。彼は冷かにお辭儀をし

て、私の手土産に對して恭しく謝した。私が彼の手に置いた束の中に葉巻の數を數へたあと、で若干をぬきとり、残りを私に返して、この上もう入用でないからと私に言つた。

私は少しばかりの金を使ふことで、もしくは私の友人の勢力で、多少なりとも彼の運命を安易にすることが出来るかどうかを彼に尋ねた。初め彼は、その肩を聳かして悲しげに微笑した。しかし直ぐに考へ直して、彼の冥福を祈る爲めの法養が營まれることを私に乞ひ求た。

「願はれるでせうか？」と彼はおづおづ附足した——「貴方に害を加へた人間に對しても法養を營んで頂くと云ふことが願はれるでせうか？」

「ああ、いいとも」と私は言つた、「しかし、此地方では私の知つてゐる限り、に害を加へた人間は一人もゐないよ。」

彼は嚴かな表情をして私の手を握りしめた。一刹那の沈黙をしたあとで彼は續けた——

「もう一つ御願ひをさして頂けませうか？ 貴方が御國へ御歸りになる時は、きつとナザアルを御通りなるでせう。少くとも、あまり遠くないピトリアを御通りになるでせう。」

「さうだ」と私は言つた、「私はきつとピトリアを通るんだらう。しかし、私はパンメリュンへそれることがないとも云へない。なんならお前さんの都合のいいやうに迂路をしてでも上げやうよ。」

「然うですか！ 若し貴方がパンメリュンへあらつしやるならば、色々面白い物を御覽になりませう。なかなか綺麗な市です。私はこのメタルを御預けしませう（彼はその頸につけてゐた小さな銀のメタルを私に見せた）。これを紙に御包み下さい——彼はその情を制する爲めに少時申絶した——「そしてこれを、私の申上げる名宛の婦人に、御手渡しの際を、或は届けさせて下さいまし、その婦人には私が死んだと云ふことを、しかし、どうして死んだかは御存じないと云ふことを御告げになつて頂きませう。」

私は彼の委任を果すべきことを約した。私は次の日再び彼を見た。而してその日の大部分を彼と共に過した。私が次ぎの悲しい物語をきいたのは、彼自身の口からであつた。

「私はバスタンの谷間に」と彼が言つた。「エリソンドオに生れた。私の名はドン・ホセ・リサラベンゴアと云ふのです。而して貴方は西班牙の事情に精通してゐらつしやるから、私の名前からして、私がバスケの人間で、また古風の基督者であることに御氣附きでせう。私はドンの稱號を用ひる資格があるから用ひます。若し私がエリソンドオに居るならば、羊皮紙に書いた私の系圖を御目にかけてせう。家族の者共は私を僧侶にしたがつた。そして學問をさせやうとした。けれども、私はそれで以て格別の益を受けなかつた。私はテニスに餘りに好きだつた——それが私の破滅を來したのです。私共ナヴァル人がテニスをやるときには、他の事は一切忘れてしまふ。一日私が勝つたとき、アラバ生れの一人の者が私に喧嘩を吹きかけた。私共は互に棒を取り上げた。而して再び私の勝に歸した。けれども、その出來事の爲めには私は國を去らなければならなかつた。

私は龍騎兵共に行會つた。而してアルマンサの騎兵隊に編入された。私共の山間から出た人間は、直ぐに軍隊の仕事を感じ込む。私は聞もなく伍長になつて、其内營長に昇進すると云ふ見込みのついたとき、過失の爲めにセパイの煙草工場へ勤務を命じられた。貴

方がもしセパイへゐらしたことがあるならば、城砦の外にグアダルクイギイルに近くあの大きな建物を御覽になつたに違ひない。私は此刹那にもあの入口や其横の守衛所が見える様に思ふ。西班牙の兵隊は勤務中にも賭博をしたり眠つたりする。私は正直なナヴァル人共のやうに、いつもなにかする事を見出さうと勤めた。私は私のブライマアを支へる爲め冗論の針金で鎖を拵へてゐた。不意に私の仲間が言つた「鐘が鳴るな。娘共が仕事をしにもどつて来るぞ」御承知の通り、あの工場には四五百の工女が傭はれてゐる。娘共は大きな室の中で葉巻を巻く。その室へは長官がらの許しが必要なければ何人も入ることが出来ぬ。なぜと言つて娘共は、とりわけ若いのは、温い時分に體をくつろげてゐるのが習慣であるからだ。女共が食事を濟ませて仕事をして歸つて来るとき、多くの若者等は集つて女共の通り過ぎるのを見、いろんな事を言つて言ひ寄る。それらの娘の中、絹のズエルを斥けやうと云ふものは甚だ少い。而してその魚釣の上手な奴等は、一寸身を屈めた丈で、もうその魚をひつけてゐる。他の奴等が凝視してゐるとき、私は入口に近く腰掛臺の上に居残つた。その頃私は若かつた。私はいつも郷里の事を思つてゐた。而して青い下袴や肩の上に垂れ

る長い髻ちんぶりのない、奇麗な娘があるものと信じなかつた。加之、アンダルシアの娘共は私に恐ろしかつた。私はまだ娘共の様子に慣れてゐなかつた。あのいつも戯話じやうだんばかり言つてゐて、一も眞面目な話をしないのに。それ故私は、鎖を拵へるのに一心になつてゐると、町の奴等が「ジプシイの娘が来る！」と云ふのをきいた。私は目を舉げてその女を見た。それは金曜日であつた。私は決して忘れないでせう。私は御承知の、あのカルメンを見たのです。あいつの家でした、私が數ヶ月前貴方に御目にかかつたのは。

「あいつは、いくつも孔あなのあいた白い絹足袋を見せる、まことに短い赤いスカートを着け燃えるやうな色のリボンで結んだ、赤いモロッコ革の細い靴はを穿いてゐた。ズエルをはづして、その肩と肌襦袢からつき出た大きなカシアの束たばとを示した。口の隅にもカシアの花をくはへてゐた。而して歩くとき、コルドヴの養馬場の小馬のやうに其腰をふつた。私の地方では、あんな様子をした女は、總ての人に十字をきらせた。セギイでは人毎に、あの女が見えるま怪しげな會釋をした。女はそれに一々答へた。純粹のジプシイらしく、やあしやあ、その腰に手を置いて、そこそこに斜まなざしの目差を投げながら、一目見たのでは私の心

を惹かなかつた。で、私は自分の仕事に歸つた。しかるにあの女は、人が呼ぶとき來ないで、呼ばないときやつて來る女共と猫との性分しやうぶんに従つて——あの女は私の前に立ち止とどつて私に物を云ひ掛けた。

「Compadre」と女はアンダルシア風ふうに言つた、「貴方のその鎖をくれませんか？ 私の弗箱はこの鍵を吊すんだから。」

「これは私のプライマアをつるすんだ」と私が答へた。

「貴方のプラアマア！」と女は笑ひながら叫んだ。「此人は、まあピンがいるからレエスを拵へるのだとき！」

「そこにあ合はすもの一同が笑ひ出した。私は血が頬へ上のぼつて來るのを感じた。どう答へてよいかも分らなかつた。

「後生ごしやうだから」と女は言葉をつぶけた。「ズエルにするヒエルの黒いレエスを、私の魂たまの針はり差を拵へて下さいな！」

「そして、口から花を取り、拇指で弾いてそれを私に投げつけ、私の目と目の間に當あてた。

私は弾丸を射込まれた感じてあつた。私はどうしてよいか分らないので、柱のやうにじつと立つてゐた。女が工場の方へ去つたとき、私は兩脚の間に、地上に横つてゐるカシアの花を見た。どんな氣だつたか知らないが、私は仲間の者共に見つからぬやうにそれを拾ひ上げ、用心深くポケットにしまつた——馬鹿な真似のしはじめなんです！」

「二三時間の後、私はやはり女の事を思つてゐたとき、一人の番兵が恐ろしい顔付きをして、息を切らしながら守衛所へ駆け込んで來た。それは一人の女が煙草の巻かれる大きな室で殺されたと云ふことと、そこへ衛兵を送らなければならぬと云ふことを私共に告げた。營長は私が二人の兵卒を連れて行つて檢分するやうにと命じた。私は、二人の者を連れて階段を昇つた。どうでせう、室へ入ると第一に、三百人の女が肌襦袢丈けになつて、わめいたり、叫んだり、雷をも凌ぐほどの恐ろしい騒ぎをやつてゐる。一方には、一人の女が床の上に、血みぎろになつて、小刀で十文字に頭をやられて横つてゐるんです。その負傷者の介抱をしてゐる向ふに、私は五六人の人につかまへられてゐるカルメンを見た。

「坊様！ 坊様！ 私は殺されました！」と傷いた女が叫んだ。

「カルメンはなんにも言はなかつた。齒を喰ひしげつて、蠍のやうにくるくるまの日の球を廻した。

「一體どうしたと云ふんだ」と私が尋ねた。私は事情を明かにするのに困難した。その工女共が一時に話しかけたからです。負傷者はトゥリアアナの市に一頭の驢馬を買ふだけの金を、懷中に持つてゐると自慢したらしかつた。

「なあに」と、黙つてゐられないカルメンが言つた。「お前さんなぞには、箒の柄位で澤山ぢやないか？」此侮辱を憤つた一方は、その點に弱味を有つてゐたからであらう、自分は生憎とツブシイに、或はサタンの子供に生れて來なかつたら、箒の柄の目利なんぞできないこと云ふこと、いづれ市長様に乗つて御出掛けになるとき、二人の従者に後から蠅を逐はせて行くのをお目にかけるであらうと云ふことを答へた。「宜しい」とカルメンが言つた。「お前さんの頬邊の蠅に水呑場を拵へて上げやうよ、そしてその上に象柑盞をかいて上げやうよ。」言ふや否や、煙草の端をきつてゐた小刀で以て、相手の顔に聖徒アンドリュウの十字架をかき出した。

「事件は十分明白になつた。私はカルメンの腕を捕へた。「私と一緒に来るんだよ」と私は丁寧と言つた。女は、私を認知したかのやうにちらりと私を見た。しかし落付いた様子で言つた——

「行きませう。エエルは何處へ置いたかしら？」

「女はそれをすつぽりと頭あたまからかぶつて、大きな目の片一方だけ出し、羊のやうにおとなしく私の二人の兵卒に従つた。守衛所へ来たとき、營長は容易ならぬ事件であると言ひ、あの女を監獄へ入れなければならぬと言つた。その監獄へ護送して行くことが、またもや私の役に廻つた。私はあの女を二人の龍騎兵の間へ置き、伍長がこんなときするやうに後から進んで行つた、私共は町へむけて出で立つた。初めの中はジプシイも黙つてゐた。しかしリユウ・ド・セルパンへ來ると——あの街道を御承知でせう、うねうねとしてゐるから名なんです——女は其魔力のある顔私に見せる爲め、肩の上へエエルを下ろし、出来る丈け私の方へ向きながら言つた——

「士官さん、貴方は何處へ私を連れて行くんです？」

「氣の毒だけでも監獄へ」と私は答へた。人の善い兵隊が囚人へ、とり分け女へ口をきくときのやうに、出来る丈けおだやかに。

「まあ！ 私はどうなることとせう？ れえ、貴方、可哀相ぢやありませんか。貴方はお若い、深切さうな方なのに！」それから女は聲を落して附け加へた、「私を逃がして下さいな。dar Iachiのひときれ一片を上げますから。それがあつた、どんな女でも貴方に惚れます。」

「dar Iachiの磁石は、ジプシイに云はせると、その使い方さへ知つてれば、どんな魔法でも使へるんですよ。白葡萄酒の盃へ一つまみの粉こなを入れて女に吞ませて御覽なさい、きつと不承知を言はなくなるんです。」——私は精一杯の眞面目な顔をして答へた——

「ここでそんな馬鹿な話をしてはいけません。お前さんは監獄へ行くんだ——お上からの命令だから、どうするわけにも行かない。」

「私共バスケ地方の生れの者には、西班牙ならば直ぐに見分けのつく語調である。同時にまた誰だれにも *but, jaoner* さへ言へないのです。だからカルメンは、私が右の地方から來たものと推定するのに困難しなかつた。御承知の通り、ジプシイは一定の國籍がなく、いつ

も旅をしてゐて、どんな言葉でも話す。そしてあいつらの多数と云ふものは、葡萄牙にも、佛蘭西にも、バスケ地方にもカタルニアにも、到處にくつろいでゐる。あいつらはムサル人や英吉利人にさへ話が出来る。カルメンは誠によくバスケの言葉を知つてゐた。

「I agun aene bilatsarena」と女が突然私に言つた、「貴方はプルオヴレス出身の方ですか？」

「私共の國の言葉はまことに美しい言葉で、それを外國できくと、ぞくぞくとします。——私はプルオヴレス出身の懺悔僧に合はせて貰ひたい」とその惡黨は聲を低くして附け加へた。

少時間を置いてから再び續けた——

「私はエクソンドオの生れた」と私はバスケの言葉で答へた。故郷の言葉を耳にして深い感動を受けながら、

「私はエチアラアルの者です」と女が言つた。それは私共の處から四時間ばかりで行かれる處です。「私はジプシイにセギイへ連れて行かれました。私はナヴァルへ、母の處へ歸る

丈の金を儲ける爲め、あの工場につとめてゐました——母は私より他に見てやるものもなく、二十本ばかりの林檎の木があるだけでムいます。ああ！ 私が國にあるならば、あの眞白い山の傍に！ みんなは、私が此土地の者でないからと云ふので、泥棒だの腐つた橙の賣手だなどお申します。そしてあのお轉婆共はみんなして私の敵になりました。セギイのあの男がよつてたかつても、私共の方の青い帽子を冠つた、あのマクイラを持つた子供の一人にも叶はないと、私が斯う言つたからでございす。ねえ、貴方、貴方は同じ土地に生れた女の爲めに、盡してやらうとは御考へになりませんか？」

「あの女は嘘を吐いた。あの女はいつも嘘をつきました。私はあの女が、生涯の間にただの一度でも、眞實を語つたことがあるかどうかを疑ひます。しかし私はあの女の言ふことを信用した。それが私にとつてよくない事だつた。女はバスケの言葉を誤覚化してゐたけれど、私はそれでも、あれがナヴァル人たることを信じた。その口や肌の色などは措いて、その目だけはジプシイたることを表示した。私は逆上させてゐて、何物にも注意しなかつた、私は思つた——若し西班牙人がプロオヴンスの惡口を私に言ふならば、私もあの女が鬨輩

をひつばたいやうに、奴等の頬邊に食はせたまに相違はからうと。一口に云ふと、私は酔
拂見たやうだった。私は馬鹿な事を言ひ始めた。馬鹿な真似をしさうになつて来た。

「私が貴方に衝つ掛れば、倒れて下さい」と女はバスケ語でつづけた。「私をつかまへるに
は、あの二人の新兵位ちや駄目ですから。」

全くのところ、私は命令をも何をも忘れてしまつた。そして女に言つた――

「宜しい、それぢややつて見るがいい。うまくやればいいんだがね！」

「その刹那私共は、セキイに少くない狭い通路の一にさしか、つてゐた。不意にカルメン
は私の方へふり向き、その拳で私の胸板を突いた。私は故らに背に倒れた。女は一飛びに
私を跳び越えて、一目散に駆出した！ バスケの女の脚は疾い。あの女のも全くそれだつ
た。私は直ぐに立ち上つた。けれども、往來を塞ぐやうに私の槍を横にしたので、兵卒達
は女の後を追はふとしたとき一寸の間ひまごらされた。やがて私は自分から駆け出した。

そのあとに兵卒共が従つた。しかし女に追ひ附くと云ふのは！ 私共の拍車や、サアベル
や、槍がある以上、何の危げもなかつた！ それを云ひつける暇もなく、囚人は已に姿を

かくした。實を云ふと、その邊の女共はあの女の逃走を助け、私共を笑ひ、私共を間違つ
た方角へ向はせた。さんざ行つたり乗たりしたあとで、私共は、典獄からの受取證なしに
守衛所へ歸らなければならなかつた。

「私の連れてゐた兵卒共は所罰をさける爲めに、カルメンが私にバスケの言葉で話したと
申立てた。而して實を云へば、あんな娘子の拳位で、私ほどの男がやすやす突き飛ばさ
れると云ふことは、誰も尤もらしく思はれなかつた。何人も疑を夾んだらしかつた。或は
あまりに明白すぎるやうだつた。義務を怠つたと云ふので、私は地位を下げられて、一ヶ
月間營倉へ送られた。それが私の軍隊へ入つてから受けた最初の刑罰であつた。もはや自
分のものだと思つてゐた營長の軍服も、とうとうおぢやんとなつてしまつた！」

「牢屋へ入つた初めの數日は、まことに悲しく過ごされた。兵隊になる時分、私は少くも
も士官になれると思つた。同郷人のロンガやミンナは總督だ。チアパランガラは――ミン
ナと同様ネグロであり御國の亡命者である、あのチアパランガラは大佐であつた。そして
私は私同様な身分のあの男の兄弟と二十邊もテニスをやつた。で、私は私自身に言つた、

「汝が刑罰を受けないで勤めた總ての時はだいなしになつた。今汝は不信川の身分となつた。而して再び上長官の引立を受ける爲めには以前の十倍も苦しい目をしなければなるまい」ところで汝は何故に刑罰を受けたのか？ 汝を愚弄したジプシイの賤婦の爲めに——それは今も、此市のどつかにかくれてゐるに違ひない。」——しかし私はあの女の事を思はないであられなかつた。貴方はそれを本當にしますか？ 私はあの女が駈け出すときの上からトまで見せた、穴だらけの絹足袋をいつも目の前に見た。私は格子の間から街をのぞいた。しかも通り過ぎる總ての女の中にも、あいつと比較になるほどのものは一人もゐなかつた。それからまた、私は我を忘れて、あの女を投げつけたカツシアの花を嗅いだ。それはもう萎んでしまつたけれど、やはりまだその好い匂を持つてゐた。若し妖術を使ふ女のやうなものがあるならば、あの娘はたしかにそれだつた！

「一日看守が入つて来て、アルカラパンの一塊を私に呉れた。」

「「さあ」と彼は言つた、「お前の従兄弟から送つて来たんだ。」

「私は甚だ不審に思ひながらその塊を取つた。セギイに私のところなんかありません。」

「間違だらう」と私は塊を瞥見したとき考へた。しかし、それがあまりに旨さうで、あまりに好い匂なので、何處から来たか、誰の處へ来たかなんぞ頓着なしに、私はそれを食べることにきめてしまつた。それを齧らうとしたとき、私の小刀はかりと何か固いものに當つた。私は調べて見て、小さな英國製の鑷を見出した。焼くときに捏粉の中にまぎれ込ましたのです。その上に尙ほ、二枚の金貨が入つてゐた。私の心には疑がなかつた。カルメシからの贈物であつたと。ジプシイの種族にとつては、自由が一切のものである。そして彼等は牢屋から一日の自由を得る爲めにも、一の市へ火を放つ。それにしても、あの女は敏捷な奴だつた。あのパンの塊で、看守共を買収出来る。一時間の内には、この丈夫な格子戸がこの小さな鑷でひき切られてしまふ。而してこの二枚の金貨があれば、私は寄附の古着屋で、私の軍服を町人の着物に脱ぎ換へられる。想像して頂くことも出来ませう、いく度も絶壁の上の鷲の巢から、その雛子を取つてゐた人間は、三十尺にも足りない窓から、街へ攀ち下るのに困却するものでない。しかし私は逃亡しようと思はなかつた。私はまだ軍人としての面目を残してゐた。そして逃亡は、卑怯なる罪惡のやうに思はれた。しかし

私はその思出の記號しるしに動かされた。人が牢屋らうごにあるときには、娑婆しゃはにゐて自分に興味きょうみを有つてくれる友人のあることを考へたいものです。金貨は少々ばかり私の心をかき亂した。私はそれを返してしまひたかつた。しかし私は何處に私の債權者を見出し得べきか？ それ私が私にとつて手輕な事と思はれなかつた。

「私の既位式の行はれた後、私はもはや此上の辛棒が出来ないと思つた。しかも尙ほ私は、今一の屈辱を被らなければならなかつた。牢から出されたとき、私は隊に復せしめられて、並みの兵同様に立番をさせられた。斯う云ふ時分、氣概ある人間がどう感ずるかば、とて御分りになりますまい。私はたしかに、銃殺される方を選んだと思ふ。さうすれば少くとも、その小隊の前を一人で歩く。自分が何者かであることを感ずる。人々が見てくれる。」

「私は大佐の門に立たされた。彼は金のある若い男で、遊事の好きな好人物であつた。若い士官はいつれも彼の家へ寄つて來た。そして多くの町人等も——女も、女優なども寄つて來るとのこゝだつた。私にとつては、市中の人間残らず、私の顔を見る爲めに彼の門へ寄り集まつて來るやうに思はれた。前後に、大佐の馬車が、箱の上に侍僕をもつて驅ら

れる。それから誰か下りるのを私は見るか——ジプシイの女です！ あの女は此時、金やリボンで没趣味に、御宮のやうに飾り立ててゐた。箱を置いた着物を着て。同じくまた箱や、花や、レエスなどをやたらにつけたるスリツパをはいた。その手には羯鼓を携へた。あの女の外に、年を取つたのと若いのと、二人のジプシイの女がゐた。あの連中の出掛けるときには、いつも一人の婆さんがついてゐる。それから一人の爺さんが、これも同様ジプシイで、連中の舞踏に合はせるギイターを携へた。御承知の通り、ジプシイを會の席へ呼んで、あいつらの國民的舞踏であるロスリスを、或は屢々その他のものを踊らせるのは、流行はやりものになつてゐるんです。

「カルメンは私を認めた。私共は目を見合せた。私はなぜか知らないが、そのとき百尺も地の下に入つてしまひたかつた。

「「Agur Laguna」と女が言つた、「貴方は、新兵みたいに立番たちばんをしてゐるんですねー」

「私が答へるべき言葉を思ひ浮ぶ前に、女は家の内へ入つてしまつた。

「會衆全體が庭にゐた。そしてさうした群衆にもか、はらず、私は門の扉を通して中の様

子、殆んど残らず見るこゝが出来た。四竹や、羯鼓や、喝采や、笑聲が聞えた。時としてはあの女がその羯鼓を以て飛び上つたとき頭も見えた。それからある士官等が、いろいろの事をあの女に言ふのをきいたときは、血が私の頬にのぼつた。私は女が何と答へたかを知らなかつた。思ふにその日であつた、私が心底からあの女を愛し始めたのは。なぜか云つて、私に三四度も庭へ跳び込んで、女に戀をしかけてゐる野郎共の腹へ、サアベルを突立ててやらうかと思つたのです。私の苦みは優に一時間を繼續した。やがてジプシイ共は出て來た。馬車が皆の者を連れ去つた。カルメンは通り過ぎるとき、あの目で再び私を見、まことに低い聲で言つた――

「女の同郷の方、うまいフライの食へたい人は、ハウリアアナのリラス・パステイアの處へ行くんですよ。」

「女は小馬の如く活潑に車へ飛び乗つた。馭者はその驟馬に鞭を加へた。そして楽しげな公衆は残らず何處かへ行つてしまつた。」

「私が勤の濟むと共に、早速トウリアアナへ出掛けたと云ふのは、容易く想像の出来るこゝ

とでせう。しかし、私は先づ顔を剃り、觀兵式の時でもあるやうに着物にブラシをかけた。女はリラス・パステイアの家にゐた。それはムウルのやうに黒い、年寄りのジプシイで、多勢の町人共が――こり分けカルメンが宿を取つてからの事でせう――フィン・フライを食へにやつて來た。

「リラスさん」と女は私を見るや否や言つた。「私今日は何にもしないよ。明日の日は晴だから。(西班牙の諺)さあ、私の同郷の方、一緒に散歩して來ませうよ。」

「女はそのエエルを引冠つた。そしてどうでせう、私は何處へ行くのかも考へず、街中を歩つてゐた。」

「御禮を言はなくちやならないね」と私は言つた。「監獄にゐるときお前さんからくれた贈物に對して。私はあのパンを食べちやつた。あの鎌は私の槍をとぐのに使はう。そしてお前さんを記念する爲めにしまつて置かう。ところであの錢はこゝにある。」

「まあ、この人は！ あれをしまつてるんだささ！」と女は叫んで心から笑つた。「でも、いい都合だわ、私も不景氣なんだから。だけど、それが何になるものですか？ 歩き続け

てある犬はいつも骨をめつける(ジプシイの諺) さあ、みんな食べちまひませうよ。貴方の御馳走になるんだわれ。」

「私共はゼギイの方角へ歩つてゐた。私共がリュウ・ド・セルパンへ入つたとき、女は一ダスばかり橙を買つて、私のハンカチーフに包ませた。少し行くとまたパンと腸詰と、一壇のマンルアニラとを買つた。お仕舞に女は菓子屋の店へ入つた。その帳場へ私のやつた金貨と、自分のポケットから出したもう一の金貨と、若干かの小さき銀貨とをばり出した。」それから私のもつてゐるみんなを出させた。私はたゞ一ヒイセツトと、數個のクアルトオとを持つてゐた。その上もう何もないので、それを出すのは随分辛らかつた。私は女がその店を總仕舞にする氣だと思つた。女は金の足りる丈、一番上等の一番高き菓子な——イエマスやトリロオンや、砂糖漬の果物などを選つた。それらの物もまた紙袋に入れて、私が持たなければならなかつた。恐らく貴方はリュウ・ド・カンテイホオを——正義者、ドン・ペドル王の胸像のある處——を御存知でせうね？ あの胸像が私の心に、ある喜ばしい考を暗示したやうだつた。私共はその街のある舊い家の前に立ちどまつた。女は入口を

入つて行つて、階下の戸を叩いた。全くのところサタンの侍女と云ひたいやうなジプシイの女が戸を開けた。カルメンはロムマニ語で、何か二言三言その女に言つた。年寄りの女は最初ぶつぶつと言つてゐた。で、カルメンはそれを宥める爲め、二の橙と、一つかみのボンボンとをやり、葡萄酒をも飲ませてやつた。やがて女は外套を肩に引つ掛けて、戸口まで、老女を送り出し、そのあとに鐵の横棒をつつかつた。私共兩人きりになるや否や、女は狂人のやうに踊つたり笑つたりし始めた——

「貴方は私の Boni 私は貴方の Boni よー」

「私は女の買物みんなを持たされて、どこへ置いていいか分からないで、室の真中に立つてゐた。女はそれをみんな床の上にほり出して、私の頸に跳びついた——

「私は借りを済ますのよ、私の借りを済ますのよ！、これが私達 Cito (譯者註——ジプシイの女が彼等自身を呼ぶ名なり) のきまりなんだから。」

「ああ！ あの日です！ あの日です！ 私はあれを思ふと、明日の事を忘れてしまふ！」
惡漢は少時の間沈黙した。やがてその煙草に火を點けかへて言葉をついだ——

「私共は一緒に食べたなり、飲んだり、その他の事をしたりして終日を過した。女は飽きるほごボンボンを食べた後、五六の子供のやうに、幾つかみかのボンボンを老女の一瓶の中へほり込んだ——」お婆さんの飲物を拵へてやるんだわ！」と女は言った。女はイエスを壁に投げつけて壊した。「蚊を私達の方へ来させないやうにするんだわ！」と女は言った。あの女のしない悪戯と云ふものは一もなかつた。私は女の舞踏を見たいものだと言つた。しかし、どうして女の四竹を手に入れることが出来やうぞ？ 女は直ちに、老女のたつた一つしかない皿を取つて、片々に打碎いた。而して一瞬の間にもうロマリスを踊つてゐた。黒檀が象牙の四竹でもあつたかのやうに、陶器や碎片でうまく拍子を取りながら實際の處、何人もあの女と一緒にゐては、退屈するといふことがなかつた。

「夜になつた。私は歸營を打ち鳴らす太鼓をきいた。」

「あれが鳴れば、私は營所へ歸らなければならぬ」と私は言つた。

「營所へ？」と女は侮蔑むやうに反復した。「貴方はネグロなんですか——ステツキで使ひ廻はされる？ 貴方はその容子から氣質から、まるでカナリヤのやうよ！ ぬらつじやい！」

貴方のやうな臆病者は！」

「私は重營倉を食ふ覺悟をして留まつた。翌朝は女からさきに別を告げた。」

「これえ、ホセさん、」と彼女が言つた。「私の借りは済んだでせうね？ 私達のきまりから云ふと、私はなんにも貴方に世話になつてはゐない、貴方は Paylo なんだから。けども貴方は好い男で、私の氣に入つたの。私達は自由の身よ。左様なら。」

「私はいつまた會へるかと女に尋ねた。」

「貴方がもつと氣の利いた人になつたとき」と女は笑ひながら答へた。それから少し眞面目な調子で、「私が少々ばかり貴方に惚れたやうに思ふのを御分りですか？ だけどそれは、長持ちがしないの。犬と猿さは、長いこと睦まじくしては行かれないんだもの。もしかして、貴方が埃及の律法に従ふならば、私も貴方の Pomi になりたいでせう。しかしこれは戯談ですよ。そんなことはありやうがないんだから。ねえ、御聞きなさい、貴方はまだまだ廉く上つた方ですよ。貴方は悪魔に、ええ、悪魔に會つたんです。悪魔はいつも黒いものぢやないんです。悪魔は貴方の首を締めなかつた。私は羊の毛を着てるけれど、羊

でない(譯者註——ツプシイの諺。)あちらへ行つて、聖母様の前に蠟燭でもお點ともしなさい。聖母様は儲たくわけましたね。さあもう一度、左様なら。もう此上カルメンシタの事を考へるんぢやありませんか。マなければ、貴方は木の足をした後家ごけさんと結婚するやうな事になりますよ。」

言ひながら、女は戸を固かためてゐた横棒をはづして、街とほりへ出ると、そのズエルに身からだを包んで私の方へ脊せをむけた。

「あの女は眞實を語つた。私はその上もうあの女のことを考へなければ賢かつたでせう。しかしリュウ・ド・カンデイレホオのあの日の後、私は他の何事をも考へられなかつた。私は女に會ふかと思つて終日歩き廻つた。私はあの老女や飲食店の主人に女の消息を尋れた。二人とも女が「赤い國」へ行つたと答へた。それは葡萄牙を言つたものであつた。恐らくあの連中はカルメンに言ひつかつた通りを言つたものでせう。しかし、私は直ぐに欺かれたと分つた。リュウ・ド・カンデイレホオのあの日から數週の後、私は市のある門に立番をしてゐた。門から近く、城壁に一の裂目があつた。晝の内その修繕の工事がなされ、夜よるにな

る。人の番兵が、密輸送者を防ぐために立たされたのです。晝の間私はリラス・パステイアが、衛所の廻りを往來して、私の件なにか侶の誰彼と話合つてゐるのを見た。誰もある男を知り、あの男の魚とフライさをよりよく知つてゐた。あの男は私の處へ来て、私がカルメンの消息をきいてゐるかどうかと尋れた。

「いや、聞かない」と私は言つた。

「ちや、お聞きになりますよ。」

「あの男は誤らなかつた。夜分私に裂目の處に立番をしてゐた。伍長が引上げるや否や、私は一人の女が私の方へ來るのを見た。私の心にそれがカルメンであることを知らせた。しかし、私は叫んだ——

「いかん！ 通ることはならん！」

「そんなに怒おこるもんぢやありませんよ」と女は言ひながらその顔を私に示した。

「やあ！ お前さんはカルメンか？」

「ええ。一寸話かしたいのよ、大急ぎで貴方は一ドゥウロオを儲けやうと云ふ氣はない

の？　そこへ今包を持つて来る人達があるんだが、通してやつて下さいな。」

「いけない」と私は答へた。「私は食ひ止めなくちやならない。それが私の軍律なんだ。」

「軍律ですと！　軍律ですと！　ちや、リュウ・ド・カンディレホオの事を忘れたんですか？」

「ウム！」と私は叫んだ、あの日の單なる思出にすつかりまひつてしまつて、「あれを思へば軍律を忘れる丈けのものはある。けども私は、密輸送者の金なんぞほしくはないんだ。」

「ちや、金がほしくなげや、もう一度ドロテアの處へ行つて食事をしよう云ふですか？」

「いや」と私はそれに要する努力を思つてうんざりしながら、「私にはやれない。」

「宜しい。貴方がそんなに頑固な事を云へば私は他の相手を探すばかりなの。私は貴方の處の士官へ行つて、それと一緒にドロテアへ行かうと言つて見る。あの人は好人物らしい。そして誰か、見る必要のある丈け見るやうな兵隊さんをそこへ立たせよう。左様なら、カナリアさん。私は軍律が貴方の首を締める日に、腹をかかへて笑ひますから。」

「私は、女を呼び返すほどに弱蟲であつた。そして必要があるならば、總てのジアシイ共をも通過させる——私の希望する報酬さへ得られるならば——ことを約束した。女は直ぐに、次ぎの日約束を果すべきことを誓つた。而して、近所にあるその連中に告げ知らす爲め急いで立ち去つた。そこには連中の五人があつた——パステイアもその一人で——いづれも英吉利の貨物をしつかりかついでゐた。カルメンは見張りをした。巡審が見えた刹那にその四竹で以て警告を與へることになつてゐたのです。しかしそれをする必要がなかつた、密輸送者共は一瞬の間に仕事を了つた。」

「次ぎの日私はリュウ・ド・カンディレホオへ行つた。カルメンは私を待たせて置いた。そしてあの女はやつてきたとき、不機嫌らしい様子をしてゐた。」

「私は、幾度も幾度も頼ませる人はきらひです。」と女が言つた。「貴方も初めの内は、随分骨を折つてくれましたが、それでどんな利益を與へられるかを知らないでも。昨日は取引をいたしましたね。私はなにしに來たのか分らない。だつて私はもう、貴方を愛してゐないんだもの。さあ、このドウウルオを御禮に上げますから。」

「私はもう少しのことです。その金を女の頭に投げつける處であつた。女を張り飛ばさないのであるのは一通りならぬ我慢であつた。一時間ばかり争つた後、私は激昂しきつてその家を出た。私は少時の間市中を狂人のやうにぶらつき廻つた。遂にあるお寺へ入つて、最も暗い片隅に身を置いて、熱湯のやうに涙を流した。不意に人聲が耳に入つた——

「龍騎兵の涙ですか！ 媚薬が出来ますね！」

「私は目を擧げた。カルメンが私の前に立つてゐた。」

「ねえ、貴方は矢張私を怒つてゐらつしやる？」と女が言つた。「私はどうしても、貴方が好きらしいのよ、そんなわけはないんだけど。だって、貴方がいつてからは、變な心持になつてしょうがないんだもの。さあ、今度は私も、貴方にリュウ・ド・カンテイレホオへ行つて戴かうと頼むのは。」

「私共は仲直りをした。けれどもカルメンの心持は私共の地方の天候のやうなものだつた。私共の山の中では、太陽の最も輝かしい時ほど、暴風雨の近くに來てゐることはない。女はドロテアの家で再び私に會はうと約束した。而してやつて來なかつた。ドロテアは、女

がその仲間の用事で、葡萄牙へ行つたこと云ふことを冷かに告げた。

「従來の経験によつて、此場合いかによべきかを知つたので、私はカルメンのゐるかも知れないと思ふ處を残らずさがした。而して日に二十回もリュウ・ド・カンテイレホオを通りぬけた。ある晩私はドロテアの家にあつた。折々茴香酒を御馳走して、だいたい懇意になりかかつてゐたのです。そこへカルメンが一人の若い男を、私共の聯隊の中尉を連れて入つて來た。」

「「あちらへあらつしやい、速く」と女はバスケの言葉で私に言つた。」

「私は胸の中をむかづかせながら茫然としてゐた。」

「「貴様は何用があるんだ？」と中尉が尋ねた。「さつさと引上げるよ！」

「私は一步をも踏み出すことが出来なかつた。さながら手足の利かなくなつた人間のやうであつた。士官は私が引上げないのを見て、略帽を脱ぐことをさへしなかつたのを見て、むかむかとして來て、いきなり私の頸飾を引擱んで、亂暴に私を揺ぶつた。私は士官に對して何と言つたかを知らない。士官はその劍をぬき、私は私の鞘を拂つた。婆さんが私の

腕につかまつた。而して中尉は私の額に斬りつけた。その痕が今でも残つてゐます。私は跳びしざつて、肘でドロテアを突き飛ばした。それから中尉が私を追ふて来たとき、私は劍のさきを相手の胸先へ突き出した。而して相手は串刺にさされた。そこでカルメンはランプを吹き消し、その本来の言葉でドロテアに逃げ去るやうに云ひつけた。私は街へ飛び出して、何方へさもなく駆け出した。誰かが後からついて来るやうに思はれた。正氣附いたさき私は、カルメンが私に離れないのであるのか見出した。

「金絲雀の大馬鹿者ね！」と女は叫んだ。「貴方は御自分を馬鹿者にするこそしか出来な
いんだもの！ 私は貴方を不仕合せの身の上にする、さう言つてたぢやありませんか？
だけど、フラメンコ・ド・ロオマを友達にすれば、何事もみなよくなつてしまふ。まづ何よ
りも、此ハンケチを御冠りなさい。そしてその吊革なんか投げ出して御仕舞ひなさい。此
路地で待つてゐらっしゃい。二三分で歸つて来るから。」

「女は見えなくなつた。まもなく、何處で手に入れたか、縞の外套を持つて来た。私の軍
服を脱がせ、シアツの上に其外套を羽織らせた。斯うした服装で、頭の傷をハンケチで縛

つて貰つた格好は、あのよく大麥水を賣りにセペイへ来る、ヴァレンシアの百姓、そつくり
であつた。それから女は狭い小路の端の、ドロテアの家やうな家へ私を連れ込んだ。女
ともう一人のツプシイとが如何なる外科醫も及ばないほど上手に、私の傷口を洗つて、繃
帯をして呉れた。それから、何だか知らないが飲料を飲ませ、お仕舞に、寢蒲團の上にな
かしてくれた。そして私はぐつぐつと寝入つた。

「恐らくあの女共は、私の飲料に秘密の催眠術を混じたものでせう。私は、翌日ずつと遅
くまで目が覺めなかつた。私は激烈なる頭痛と輕微なる發熱さを感じた。私が前の晩の恐
ろしい活劇を想起したのは、少時たつてからの事であつた。私の傷口を繃帯をし直したあ
とで、カルメンとその仲間とは、私の寢蒲團の側にしやがみながら Chipe Calli 二言三言
を交へた。それは治療上の相談であると思はれた。やがて二人は口を揃へて、私が間もな
へよくなるであらうと云ふことを、けれども成る可く速かにセペイを去らなければならぬ
——若しも私がかまるならば、銃殺されるに違ひないから——と云ふことを私に告げた。
「これえ、坊ちゃん」とカルメンが言つた、「何かしなくちやいけませんよ。もう王様から

お米も乾魚も載けないんだから、なにか糊口の方法を考へなくちやいけませんよ。貴方は頼馬だから、かつばらひなんか駄目ですれ。けども活潑で、なかなか強い。勇氣があつたら海岸へ行つて、密輸出入をやることです。私が貴方のぶらん、往生の原因になるのは、前から約束してゐたてせう。その方が、銃殺されるよりもましてすか？ もつとも、うまくやれば、Misons と警備隊とに頸髪を引摺まれないである内は、殿様のやうな暮しが出来るんですがね。」

「斯う云ふ具合 旨い事を言つて、あの悪黨の女は、私にあてはめたる新しい役割を指し示した。全くのところ、死刑に待受けられてゐる私には、他にとるべき方針もなかつた。正直に申します、女はわけもなく私を説得した。そんな危ない恐ろしい生活を營むことによつて、女により親密になれると思つたのです。その時から私は、女の愛情を保證されたやうに思つた。私は前から度々聞いてゐた——遅ましい馬に跨つて、喇叭鉛を提げて、情婦共を背に乗せて、アンダルシアを横つた密輸出入者の事を。私は私自身既に奇麗なジプシイを連れて、山や谷を踏み越えてゐるやうに想つた。私がそれを話したとき、女

は涙の出るまでに笑つた。而して野營の夜ほど面白いものはないと云ふことを、そのとき男女等がそれぞれに、三の竈で造られた、毛布で蔽はれた小さな天幕へ引退くると云ふことを私に話した。

「私がもし、山の中へ一緒に入つたら」私は女に言つた、「お前さんの事を安心が出来やう！ さうなればもう中尉さんさ、山分けにしないでよからうから。」

「まあ！ 貴方は嫉妬深いのね」と女が答へた。「それだけつまり貴方の御損よ！ 如何してさうなんでせう？ 貴方には、私の思つてゐることが分らないかしら？ 一度だつて貴方からお錢を貰はないぢやありませんか。」

「こんな調子に話をされると、私は女の首を締めてしまひたいやうに思つた。

「手短かに云ふと、カルメンが通常人の服を工面してくれ、私はそれを着て、人目に留まらぬやうにセザイを立去つた。私はバステイアからある茴香酒商への手紙を持つてヘレスへ行つた。その家が密輸出入者の集合所になつてゐたのです。その男が私を連中へ紹介してくれ、首領のダンイイルと云ふのがその組へ入れてくれた。私共はゴオシインへむけて

立つた。そこで私はカルメンに會つた。さう云ふ約束になつてゐたのです。女は私共の遠征隊に斥候をつとめてゐた。あれ以上の斥候はあつたことがない。あの女は丁度デブラルタアルから歸つたばかりであつた——英吉利の貨物を一船廻はして來るやうに船長と協商した後ののです。私共はそれを海濱で待受ける爲めエステボナへ行つた。そして山の中へ一部分を隠した。それから残りの貨物をロンダへ運んだ。カルメンは前まきに行つてゐた。それへ乗込むべき好時機を知らせたのもカルメンであつた。この第一の遠征と、その後數回の遠征とはまことにうまく行つた。密輸出入者の生活は兵隊のそれよりも面白かつた。私はカルメンに贈物をした。私には金もあり女もあつた。私は別に悔恨の苦みをも感じなかつた。なぜといつて、ツプシイのいふ通り、「おたのしちゆうみか中はか痲かがか痒かくない」からです。私共は到いたる處ところに歓迎された。仲間の者等は私を優遇してくれ、敬意をさへ拂つてくれた。それは私が人を殺したから、またその中にはさうした手柄を立てたことのない者等があつたからです。しかし、私の新生活に入はいつて何よりも嬉うれしかつたのは、度々カルメンに會へると云ふことであつた。カルメンは前よりも一層情愛を見せた。けれども私共の仲間の前では、

私との關係を打明けなかつた。これに就いてはなんにも口にしないと云ふことのあらゆる誓言せいごんをさへ私に立てさせた。女の前に意氣地いきぢのない私は、どんな氣儘な注文をおこなしく受け容れてゐた。加之のみならず、女はそのとき始めて、堅氣かたぎな女のつつましやかさを私に示した。そして私は、女が眞まことに從來これまでの遺口やうぐちを改めたものと思ふほどに單純であつた。

「八人乃至十人から成立する私共の隊は、何か重大な事件の起つたときの他、滅多に會合しなかつた。普通は二三人宛方はうかた々の町や村に散らばつてゐた。各自職業めいごくしよくげふのあるやうに見せかけて、鑄掛師いかけやもあり、博勞はくらうもあつた。私は絹商人きぬあきうどであつた。けれどもセザイの一件があるから、人目ひとめに立つやうな場所へは、成るべく顔を出さないやうにした。

「一日あるひ、或は寧ろ或る晩、私共の集會所がエゲルの麓であつた。ダンカイルと私とは他の連中よりさきに行つてゐた、ダンカイルは非常に調子づいてゐた。

「俺達には新しい仲間が出來かかつてゐる」と言つた。「カルメンの腕は凄すごい。タリファの監獄かんごくにゐたTomを逃げ出させた。」

「私は大抵の仲間共の話す、ツプシイの言葉を既に理解し始めてゐた。而してそのTom

(譯者註——其人もしくは情夫のこと)と云ふ言葉が、私の胸にぎくりと徹えた。

「なんどと? 亭主を! あの女には亭主があるのか?」と私は隊長に尋れた。

「さうさ」と隊長が答へた、一目のガルシアと云つて、あの女にまけない位の狡猾なジプシイだよ。それが舸船船にゐた。カルメンはうまく外科醫をまるめ込んで、亭主を自由の身にした。いや、なかなか感心なものだよ! 二年間と云ふもの、亭主を脱げ出させるのに苦心して来たんだからな。しかし、外科醫の更迭があるまでは、どの計畫もどの計畫も物にならなかつた。新任の外科醫は直ぐに妥協が出来たらしい。」

「此報導が私に與へた悦びは、御推察を戴くことが出来る。私は間もなく「一眼」のガルシアに會つた。あの男はジプシイの間に生れた、最もいやな怪物であつたと思ふ。肌の黒いそれよりも一層腹の黒い奴で、私は一生の中かつて、あんな圖々しい悪黨を見たことがない。カルメンもあいつと一緒に來た。そして私の前であいつを自分のTomと呼んだときの女の目付きと、ガルシアが傍見をしたときの顔付きとを、出来るものならば御覽に入れた。私は腹立たしさに、其晩女と口を利かなかつた。翌朝私共が荷作りをして、愈々出發

しかかつてゐたとき、十人餘りの騎兵が後から追駈けて來るのを見出した、何ぞと云ふと人殺の話ばかりする駄法螺吹きのアンドルシア人共は、誠に氣毒な無態を示した。一同が逃げ出した。ダンカイイルヤ、ガルシアヤ、レメンダドオと仇名をされた、エシハ生れの男振の好い若者や、井びにカルメンは、格別狼狽もしなかつた、他の連中は驃馬を打棄てて、馬の追駈けて來られない峡谷の間へ跳び込んだ。私共は驃馬を引張つて行くことが出来なくなつたので、目星しい獲物を解いて、各自の肩に引掛け、それから絶壁の峻しい傾斜を下へ逃げやうとした。私共は前に包みを投げ落して置いて、そのあとへ出來る丈けうまく滑り下つた。此間敵は絶間なく砲火を浴びせてゐた。私は始めて彈丸の唸りを聞いたのだけれど、格別太したことやうに思はなかつた。女の目の前になるとき死を輕ずるのは骨の折れることでない。他の者は皆免れたが、レメンダドオは腰を打たれた。私は自分の包みを投出して置いて、レメンダドオを運ばうとした。

「馬鹿な!」とガルシアが叫んだ、「そんな益體もない物をどうするんだ? 引導を渡してやれ、そして長襪の包みをなくしない事だ!」

「打棄つて置けばいいわ！」とカルメンは私に言った。

「堪へ難き疲労が、一寸の間岩陰にレメンダドオを置くべく餘儀なくさせた。ガルシアは歩み寄つて、その腦天を目掛けて喇叭銃を打込んだ。

「斯うして置けば、容易な事であの男だと云ふ辨識がつくまい」と彼は言った——「ダスの銃丸によつて片々に裂かれた顔を見遣りながら。

「御聴き下さい、私は斯ふ云ふ立派な生活をして来たのです。其晩私共がある林の中へ来たときに、全くへとへとになつてゐた。あの兇惡なガルシアは何をしたか？あの男は其ポケットから一組の骨牌を抽出して、ダンカイルと、あいつらの焚きつけた火の影に勝負を始めた、その間私は草の上に横臥つて、星を見上げたり、レメンダドオの事を考へたり、いつそ彼奴の身代りに立てばよかつたと自分自身に言つたりしてゐた。カルメンは近くに坐つて、折々四竹を打鳴らしながら低聲に唄つてゐた。やがて何事かを話しかけるやうに身を寄せながら、殆んど私の意志に反して、二三度私にキスをした。

「お前は惡魔だ！」と私は彼女に言った。

「然うよ」と女が答へた。

「數時間休息したあさて、女はゴオシインへ向つて出立した。而して次ぎの日一人の若い牧羊者が食物を持つて来て呉れた。私共は終日そこにゐた。夜に入つてゴオシインの方へ進み、カルメンからの消息を待つた。しかし何人もやつて来なかつた。夜明に私共は、一人の驛夫が日傘をさした、着飾つた婦人と、その召使らしい、少女を導いて来るのを見た。ガルシアが言つた——。

「二頭の驛馬と二人の女とを、聖徒ニコラスが贈つて呉れたよ。どちらと云へば、四頭の驛馬の方が有難いんだが。まあ、いいや、役に立つ丈け立たせて見よう。」

「彼はその喇叭銃を引摺んで、下生に身を隠しながら徑の方へ這ひ寄つた。ダンカイルと私とは少し間を置いて彼に従つた。手の届くまで来たとき、私共は身を露はして、驛夫に止まれと呼びかけた。婦人は私共を見て恐れることの代りに——私共の服装は女を恐れしめるに不足のないものだつたが——聲高く笑ひ出した。

「は！ は！ 私を物持の御客様と取違へるなんぞは、随分の間抜けだよ！」

「それはカルメンであつた。しかも他の言葉を話したならば、とても見分けがつかないかたであらうと思ふほど巧みに化けてゐた。あの女は驃馬から跳び下りて、少時の間ダンカイルやガルシアと低聲に話した。それから私の方へふり向いて言つた——

「かなりあさん、お前さんの首の締まる前にまた會ひませう。私は取引をしにザアラタルへ行くんです。直ぐに消息をしますからなれ。」

「別れる前に女は、私共の數日間隠家にする事の出来るやうな場所を指定した。あの女はまつたく私共の仲間の神意であつた。私共は間もなく女が送つてくれたところの金を受取り、尙ほより値打のある報道を受取つた。それは斯く斯くの日二人の英國貴族が、斯く斯くの道を通つてグルノオブルへむけザアラタルを立つと云ふのであつた。賢い人間には一言で足りる、貴族等は夥しき金貨を携へた、ガルシアはそれを殺したかつたけれど、ダンカイルと私共が反對した。私共は唯だ、切實に必要な感じてゐたところのシアツの他、金と時計とを取つただけだつた。

「人間は知らず知らず悪黨になるんです。美しい女の子がその分別を取上げてしまふ。

その女の子の爲めに喧嘩をする。不慮の事件が発生する。山の中で生活しなければならなくなる、さて氣が附いて見れば、密輸出入者から盜賊になつてゐる。私共はあの貴族の一件があつて後、ザアラタルの近邊にゐるのを安全でないと思ひ、シエラ・ド・ロンダに身を潜めた。貴方は前にホセ・マリアの事を仰しやつたが、私のあいつと知合つたのはそこであつた。あいつは其遠征に情婦を伴つた。その女は利發な、控目な様子の淑かな少女で、かつて風の悪い言葉遣なんぞしたこともなく、希しく殊勝な心掛を有つてゐた。それだのにあいつはその女を甚だ不仕合にした。あいつはいつも他の女共を追かけ廻りその女を虐待し、また折々嫉妬深く見せかけやうとした。一度あいつは小刀で以てその女を刺した。するとその女は一層あいつを愛するやうになつたに過ぎない。女は、とりわけアンダルシアの女は斯う出来てゐる。その女はその腕の舊傷に誇を有つて、それが世の中の最も美しいものででもあつたかのやうに出して見せた。其上にホセ・マリアは仲間中で最も宜しくない奴だつた。私共は一緒にやつた。ある遠征の時なども、あいつは自分一人でうまい汁を吸ひ、私共はただ骨折損の勞儲けになつたことがある。さゝらで話の本筋へ立

歸り、——私共はカルメンから何の消息たよりをも聞かなかつた。

「誰だれかザラルタルへ行つて、あいつの様子を見て來なくちやなるまい」ミダンカイイ
ルが言つた。「あいつ俺達の爲めに何かの仕度したくをしてくれたには違ひない。俺は自分で行き
たいんだけれども、ジラルタルには顔が通り過ぎてゐるからな。

「一眼ひとつめが言つた——」

「俺もさうだ。どいつもこいつも俺を知つてゐる。うみざりがに（註—英國人の事）の料
理をしすぎたからな。それに俺の片眼かためぢや化けはにくい。」

「ちや、俺が行かうか？」と私は自分の順番になつたので、また、再びカルメンに會へる
といふ丈だけの事がたまらなく嬉うれしかつたので言つた。「一體、どう云ふ事をして來るんだ」

「ダンカイイルは答へた——」

「海からでも、サン・ロツケを通つて行つてもいい。ザラルタルへ着いたらば、ロヨナ
と云ふチヨコレト賣のゐる處ところをきいて見る。その女に會へば、あちらの様子が分るんだ」
「私共三人でシエラ・ド・ゴオシインへ行き、そこからは私一人て、果物賣に化けてザラ

ルタルへ出掛けると云ふことに話がきまつた。ロンダで、私共に買かれてゐる一人の男が
旅行券りょこうけんをくれた。ゴオシインで私は驢馬ろばを買つた。私はそれに橙だいだいや甜瓜まぐわを買かせて出で立
つた。ザラルタルへ着いて見ると、ロヨナはなかなか名の通つたものだつた。けれど
も、その女は死んだのか、「地球ちきゅうの端はしへ」行つたのかであつた。そしてその女の不在が、カ
ルメンと消息を通ずる道のなくなつたことを説明するやうに思はれた。私は驢馬ろばを厩うまに入
れ置き、橙だいだいをさげながら、それを賣るやうな風をして市中をぶらついた。實際は誰たれか見知
越この顔かほに會へればと望のぞんだのです。ザラルタルには、地上のあらゆる國々くにから有象無
象しやうむしやうがよつて來て、それこそバベルの塔を拵とつてゐる。なぜと云つて、どんな街まちでも十歩行
く中には十種類の國語こくごを聞かないであられないから。私は幾人いくたりものジプシイを見つけたけれど
容易に信用する氣にならなかつた。私はあいつらを穿鑿せんさくし、あいつらは私を穿鑿せんさくした。私
共は互に他の惡黨あくどうであることを洞察たうさつした。要點は私共が同じ組に屬してゐるや否やを知る
ことであつた。無益に二日間を彷徨ぶらついたあとで、私はロヨナやカルメンに關して何物をも
知らなかつた。で、少しばかりの商あきなひをした上、仲間の處へ引返さうと思つてゐたとき、

日暮近くある街を通りぬけながら、一人の女の聲が窓から私へ呼びかけてゐるのを聞いた

「橙賣さん！」と。私は仰向いて、バルコニーの上にカルメンを見た。赤の軍服に金色

の肩章をつけた、毛の捲いた—— すつかり英吉利の貴族らしく出来てゐる、士官と共に
欄干にもたれてゐた。女も随分めかしてゐた。肩にシヨオルをかけ、金の櫛をさし、着物
はみんな絹すくめであつた。而してあのあばずれは——いつも同じだ！腹をかかへて笑つ
てゐた。その英吉利人は覺束ない西言語で、淑女が橙賣を御求めになるから、上つて来い
と私に呼びかけた。カルメンはバスケ語で言つた——

「お上んなさい。なんにも驚くんぢやありませんよ。」

「事實あの女の方では、私を驚かさうと云ふつもりでなかつた。私は再び女を見て、より
多くの悦びを感じたが、より多くの悲みを感じたが分らない。入口の扉は背の高い、頭を
てかてかと光らせてゐる、英吉利人の下僕によつて開かれた。それが私を立派な客室へ案内
した。カルメンは直ぐにバスケ語で私に言つた——

「貴方は西言語が解らないんですよ。私を知らないんですよ。」それから英吉利人へふり

むいて「私さう言つたでせう」この男のバスケ人なのが直ぐに分りましたと。あの妙な國
語を御聞きになつて御覽なさい。どうでせう、あの間のぬけた顔付は？ なんの事はない
臺所でつかまつた野良猫ですれ。」

「そしてお前は」と私は私自身の國語で女に言つた、「千枚張のあきれた面だ。その面をお
前の情人の前ではり飛ばしてやりたいよ」

「私の情人！」と女は言つた。「貴方は獨り断にさうきめてゐるんですね。そして此野呂
間を妬いてるの？ 貴方はあのリュウ・ド・カンテイレホオの晩の前よりも馬鹿になつたん
ですよ。どんなぼんやりだつて、私が今仕事をしてるのは、此腕によりをかけてるのは分
りさうなものなのに。此家も私のもの、うみざりか金の貨も私のものよ。私は此人の鼻
のさきをとつつかまへて、その内、二度と引返せない處まで連れ込んでやるんだから。」
「ちや俺はお前がこんな風で仕事をつづけやうと云ふのなら、俺はもう二度とやらせない
やうに氣をつける。」

「おや、おや！ 貴方は私に指圖をするromなんですか？ 一眼が差支なしと言つてるのに、

貴方が彼是言はなくなつて。貴方は、私の一人つきりの情人になつてりや澤山でせう？」

82

「何と言つてる？」と英吉利人がきいた。

「喉が渴くから一杯飲みたいと言ふんですよ」とカルメンが答へた。

「而して女は、その翻譯を笑ひこけながら長椅子に身を投げた。

「あの女の笑ふときには、止めやうがなかつた。皆の者があの女と一者に笑つた。脊の高
い英吉利人も、野呂間らしく笑つた。而して何かの飲料を私の處へ持つて來るやうに命じた

「私が飲んでゐたときカルメンは言つた——

「あの人の指にはめてゐる指環を御覽なさい。貴方がいれば上げますよ。」

「私は答へた——

「俺はお前の旦那を山の中へ連れ込んで貰へれや、指一本ぐらゐ出してもいいよ——俺達
が各自 Maguila (註——前に説明したる如く、その尖頭に鐵を穿かせたる棒なり) をさげ
てる處へ。」

「Maguila——とは何だ？」と英吉利人がきいた。

「Maguila ですか」とカルメンが笑ひながら答へた。「橙の種類です。随分面白い名をつけ
たものでせう？ 貴方に Maguila を召上つて戴きたいと言ふんですよ。」

「さうかい」と英吉利人が言つた。「ちや、明日その Maguila を持つてお出でよ。」

「私共が話してゐた間に、下僕は入つて來て、食事の用意が出来たと言つた。英吉利人は
起つて私に一枚の銀貨を呉れ、その腕をカルメンに差し出した。彼女がただ一人では歩け
なかつたかのやうに。カルメンはやはり笑ひながら私に言つた——

「坊ちやんは御招きするわけに行きません。けども明日、検閲の太鼓が鳴り次第、橙を持
つてゐらつしやい。貴方はリュウ・ド・カンデイルホオのあれよりも立派な室へ入れます。
そして此カルメンシタが、やつぱり貴方のものであるか、ないかが分ります。そのあとで
商賣の話をしませうよ。」

「私は返辭をしなかつた。そしてもう街へ出てゐたとき、英吉利人の私に呼びかけるのを
聞いた——

「明日その Maguila を持つてお出でよ——」而して私はカルメンの笑聲をきいた。

83

「私は何をすると云ふ考もなく出て行た。私は殆んどれなかつた。朝になつてからも、あの薄情者が癪に障つてたまらないので、あの女に會はずにゲアラルタルを立去らうと決心したけれども、太鼓が一つ鳴り出すと、私の勇氣は急に挫けた。私は橙の袋をさげてカルメンの處へかけつけた。女の簾戸は半ば開いてゐた。而して私を見守つてゐる、女の大きな黒い目が見えた。頭を粉で光らせた下僕は直ぐに私を案内した。カルメンはそれに用事を云ひ附けた。私共が二人つきりになるや否や、あの女は鰐魚の笑を笑ひ出して、私の頭に抱きついた。あの時ほど美しくあの女を見たことがなかつた。聖母のやうに着飾つて匂物を匂はせて、絹をかぶせた家具や、繻を洗した、カアテンにとりまかれて——ああ！それに私は、あんな山賊のやうな風をして！」

「Minchorri（註——情人の意味）」とカルメンが言つた。「私は、この物をみんな打壊して、この家に火をつけて、山の中へ飛んで行きたいやうに思ふは！」

「それから、あの熱烈な抱擁があつた！あの笑があつた！女は跳びはねたり、その縁飾をさいたりした。」如何なる猿もあれよりふざけた、あれより面白い動作を見せなかつた

再び眞面目になつたとき——

「一寸」と女は言つた。「商賣の談ですがね。私は奴さんにロンダへ連れてつて貰ふことにするわ。あすこに、尼さんになつて姉妹があると云ふわけで（新しくまた笑ひ出した）。私達の通路はちやんと教へて置くから。貴方はいきなり飛び出して行つて、奴さんを剥いでしまふのさ！一等善いのは片附けてしまふですよ。けどもさ」女は附加へた。斯う云ふ時分女の漏らす微笑は、誰も眞似手のないやうなものだつた——「貴方の役目が御分りですか？一目をさきへ出しておやりなさい。貴方は殿になるんですよ。あのうみざりがにはなかなか手強いんだから。ピストルも好いのを持つてるから、解りましたね？」

「女は新しくまた笑ひ出して言葉を途切つた。それが私を戦慄させた。」

「それはいけない」さ私は言つた。「ガルシアは憎い奴だけれど、兎に角俺の仲間だ。その内俺はお前をあいつの手から引放してやらう。しかし俺達は自分の國の慣習で始末をつけたい。俺は不圖した因縁からジプシイになつたものの、事柄によつちや、いつまでもナヴァル人で通すんだからな。」

女は答へた――

「貴方は馬鹿な、本當に間拔な人ですね。唾が遠方まで飛べば、自分の脊を高いやうに思ふ、あの一寸坊師見たいな人ですね、貴方は私を思つてくれるんぢやない。さあ、去つて下さい！」女が「去つて下さい！」と言つたとき、私は女を離れることが出来なかつた。私はザアラタルを去つて、仲間の處へ歸り、英吉利人を待受けることを約束した。女は女で、ロンダへ向けてザアラタルを去るまでは、病氣を云ひ立てて居ると云ふことを約束した。私はそのあと更に二日の間をザアラタルに逗留した。女は大膽にも姿を變へて私の宿へ會ひに來た。私はその市を去つた。私にも亦私丈の計畫があつた。私は英吉利人やカルメンの通過すべき處と時とを承知の上で、私共の集合所へ引返した。カンカイイルとガルシアとは私を待つてゐた。私共は熾に燃え立つてゐる松毬の火の傍で、森の中にその夜を過した。私はガルシアに骨牌の勝負を挑んだ。ガルシアは應じた。二度目の勝負に於て私はあいつが誤覚化しなやつてると言つた。あいつは笑ひ出した。私は骨牌をあいつの顔に投げつけた。ガルシアはその鐵砲を執らうとした。けれども私はその上に足

を置いてあいつに言つた、「貴様はマラガの無賴漢の誰よりも、小刀の遣方が巧いと云ふことだ――一つ俺とやつて見ろ！」ダンカイイルは私共を引分けやうと試みた。私はガルシアに二つ三つ鐵拳を食はせた。怒があいつを奮ひ起させた。あいつはその小刀を、私は私のを引きぬいた、私共は何れもダンカイイルに、邪覺をしないで、尋常に勝負をさせてくれるやうに言つた。ダンカイイルも引留められぬと見て取つて手を引いた。ガルシアは猫が鼠をねらうやうに、體を二重に折りまげた。あいつは身をかはす爲めに左の手に帽子をつかんで、小刀を前へ突き出した。それはアンダルシア人の身構だ。私はあいつの眞前に左の腕を上げ、左の足を踏み出し、小刀を右の股に引きつけて、ナザアル風に突立つた。私は三人よりも力強く感じた。あいつは電光の如く私へ飛びかかつた、私が左の足でくりき廻つたので、あいつは空を撃たされた。私は喉を刺した。而して私の小刀は柄元まで入つた。私は刃のもげるまでにそれを扭ぢた。それが結末であつた。小刀は腕のやうに大きな血汐の流によつて傷口から押出された。あいつは棒の如く硬くなつて地上に倒れた。「貴様は何だつてそんな事をしたのだ！」とダンカイイルが私に尋ねた。

「聽いて呉れ」と私は言った。「俺達は一緒に生きて行かれないのだ。俺はカルメンに惚れてゐる。そしてあいつを自分一人の物にしたいのだ。それがガルシアはひどい野郎だ。レメンダドオの事は今に忘れられないからな。處で俺達は二人つきりになつたが、別に心細いことはない。どうだ、貴様は俺と生死を共にする氣がないか？」

「タンカイイルは私にその手を與へた。あの男は既に五十歳前後であつた。」

「色戀の沙汰ほどべらばうなものはあるまいな！」と彼は呼んだ。「貴様がカルメンをほし」と言つたら、銀貨一枚でも賣つて呉れたらうによ。兎に角俺達は二人きりだ。明日は如何したものだらう？」

「俺一人に委して置よ」と私は答へた。「俺、もう世の中になんにも恐しいものはないんだ。」

「私共はガルシアを埋めた。而して二百歩ばかりあちらへ陣屋を移した。次ぎの日カルメンと例の英吉利人とは、二人の驛夫に一人の僕をつれて通り掛つた。」

「私はタンカイイルに言つた——」

「俺は英吉利人を片附ける。貴様は他の奴等を脅しつける——奴等は素手であるんだから

「英吉利人は勇敢であつた。若しカルメンがあいつの腕をこぶかなかつたならば、あいつは私を殺したてせう。手短かに言ふと、私は其日カルメンを取り返した。而して私のあの女に對する第一の言葉はあの女の寡婦であると云ふことを告げることだつた。その顛末を聞いたとき女は言つた——」

「貴方は不相變の馬鹿者ね！ガルシアに殺されなかつたのは間違ひですよ。貴方のナツアル仕込みなんか、なつてやしない。それにあの人は貴方よりもずっときついのを幾人もやつつけたことがあるんだもの。やつぱり、あの人にも年貢の納めどきが來たんですね。貴方にもいつれ來ませうよ。」

「お前にも」と私は答へた。「俺のものになりきつてくれなけれや。」

「いいわ」と女が言つた。「私は幾度も珈琲の殘滓で私達が一緒に死ななくちやならないことを卜つたの。なあに！掃いた物を蒔る丈けの事なんだもの！」

「斯う言つて女はその四竹を鳴らした、女がその不愉快な考を追拂はうと思ふときいつもするやうに。」

「人は兎角自分の事を話すとき自分を忘れ易い。此等の物語は、きつと貴方を退屈させたに違ひない。しかし、程なく片附けてしまひます。私共はさうした生活を可なり長い間繼續した。ダンカイルと私とは、前よりも力になるやうな幾人もの仲間を加へた。而して密輸出入を専心やつてゐた。時としては、隠さず申上げなければならぬ、往來に通行の人をつかまへた。もつとも、それはよくよくの時、他に方法のない場合にのみ限られてゐた。しかし私共は、旅人達を虐げることせず、その持合の金を捲上げる丈けだつた。數ヶ月の間私はカルメンに對して何の不足をも感ぜず暮してゐた。あの女は引續き私共の仕事に有益な報告を供給して重寶がられた。時としてはマラガに、時としてはコルドヴに、時としてはグラナダに逗留してゐた。けれども、私から一言便りをするさ、萬事を打棄つて私に會ふため、物淋しい宿屋へ、或は私共の野營へすらやつて來た。たつた一度、——マラガに於ける事だつた——カルメンは私に不安を抱かせた。私はあの女が金持の商人と心易くなつたときいた。女は恐らく、ザプラルタアルの狂言を反復しようとしたのでせう。ダンカイルが色々言つて引留めるに係はらず、私はあいつを残して置いて、白晝マラカ

へ出掛けて行つた。私はカルメンを捜し當てて、直ぐに連れ出した。私共は激しく文句を言ひ合つた。

「お前さんには分らないの？」と女が言つた。「お前さんが私の良人になつてからはたゞの情人であつた時分ほど可愛がられないと云ふことを。私は苛められるのが、別して命令されるのがきらひだから！ 私の好きなのは、勝手氣儘にしてゐることです。私の勸忍袋の張りさけないやうに氣をつけて下さい。私も辛棒が出来なくなれば、ごつから氣の利いた人を引張つて來て、お前さんがあの一目にしたやうな事をお前さんにさせますよ。」

「ダンカイルは私共の間を仲裁した。けれど、私共は、お互の心に蟠つてゐる事を言ひ合つてもはや従前のやうな關係になれなかつた。その後間もなく、一の事件が持上つた。兵隊が私共を襲ふた。ダンカイルは他の二人の仲間と共に殺され、その他の二人は捕まつた。私はひどい怪我をした。そしてあの善い馬を持つてゐなかつたならば、兵隊の手に落ちたであらう。すつかり勞れきつて、體に彈を受けて、私はたつた一人の仲間と共に或る森の中へ隠れた。私は馬から下りたとき氣が遠くなつた。而して傷いた兎の如く、その下

生の中に死んでしまひさうに思はれた。仲間が私を、私共の知つてゐる洞穴に運び、それからカルメンを捜しに行つた。女はグラナダにゐたが、直ぐに私の處へ駆けつけた。二週間と云ふもの、女は少時も私を去らず、微睡もしなかつた。如何なる婦人もその最愛の男子に對して示したことの無いやうな熟練と、熱誠とを以て私を看護した。私が立てるやうになるや否や、女は人目に立たぬやうにして、私をグラナダへ連れて行つた。ツプシイは到處に安全なる避難所を見出すのです。而して私は六週間以上も、私を捜索中の市長から二軒目の家にあつた。窓扉の背から外を見てゐたとき、私は幾度も市長の通るのを見た。遂に私は癒えた。しかしながら私は、病床に於て深く自らを省みた結果、自分の生活を改めやうと思つた。私はカルメンに、西班牙を去つて、「新世界」へ正業を求めに行かうと談つた。女は私を笑つた。

「私達はキヤベツを植ふるやうな柄ぢやない」と女は言つた。「私達はどうせ他の人間を食物にして暮すのさ。御聽きなさい——私はデアラタルタルのナタン・ベン・ホセフと話をつけたの。あの人は貴方が木綿物の俵を密輸入してくれるのをばかし待つてます。貴方の生

きてる事を知つてゐて、貴方をあてにしてゐるんですよ。貴方が約束を反古にするんぢやデアラタルタルの取引先はなんと云ふんでせう？」

「私は女に説得されて、よくない商賣を再びはじめた。

「私がグラナダに隠れてゐたとき、そこに闘牛があつて、カルメンも行つて見た。女は歸つて来て、ルカスと云ふ、非常に巧妙な闘牛士の事をいろいろ話した。女はその男の馬の名や、その男の繻をしたツヤケツの値段を知つてゐた。私はそれに何の注意をも拂はなかつた。私の唯一の仲間なるジュアニトオは、數日経つてから、サカテンの川岸の店にカルメンとルカスとを見たと言ふことを告げ知らせた。それが私の心を騒がし始めた。私はカルメンに、あの女が如何にして、また何故にあの闘牛士と懇意になつたかを尋ねた。

「あの人は物になるんです」と女が言つた。「音を立てる川には水があるか、それでなければ石がある。あの人は今度の闘牛で、二百リアルを儲けたの。だから二に一と云ふ處よ——あの金を捲上げてしまふか、でなければ、あの人も騎馬は巧いし、元氣はあるしすから、こつちの仲間へ引張り込むか、だいぶ私達の仲間も亡くなつたんだから、補充しなくちや

ならない。引張り込んでしまひませうよ。」

「俺には、あいつの金も、あいつの體からだもいらなんだ」と言つた。「そして俺は、お前にあいつと話をさせない。」

「氣を御附けなさい！」と女が言つた。「私にさせないと言はれる事は、間もなくされてしまふんだから！」

「仕合せと闘牛士はマラガへむけて立去つた。而して私はあの猶太人の木綿の俵を持込むことに注意をむけた。私は其の仕事に忙しかつた。カルメンも忙しかつた。私はルカスを忘れた。女も、少くとも、その間忘れてゐたでせう。あの時分の事です、始めモンテイヤの近くで、次ぎにコルドヴで、私が貴方にお目にかかつたのは。後の會見に就いてはなんにも言ふまい。恐くらは貴方の方が私よりもよく記憶してゐらつしやるでせう。カルメンは貴方の時計を盗んだ、あの女は貴方の金をも欲ほしがつた。またとりわけ、貴方の指にはまつてゐたあの指環をほしがつた。あの素張らしい指環は是非とも手に入れたいと女は言つた。私共は猛烈な喧嘩をして、そして私は女を打つた。女は眞蒼になつて涙を流した。

それが私に恐ろしい影響を及ぼした。私は女に救しを求めたが、女は終日機嫌を直さないでゐた。而して私がモンテイヤへ歸る爲めに出で立つたとき、女は私にキスすることを拒んだ。私の胸は重苦おもくしかつた。すると三日経つてから女は、雲雀ひばりのやうに陽氣に笑顔えがほをつくりながら私に會ひに來た。總ての事が忘れられて、私共は再び戀人のやうになつた。別れるときに女は言つた――

「コルドヴに祝祭おまつりがあるつてことだから、私はこれから出掛けて見るの。お金を持つて引上げる者があつたら知らせます。」

「私は女に出掛けさせた。ただ一人になつたとき私は祝祭おまつりを考へ、カルメンの心持の變化を考へた。「あいつ自分の方から仲直りをしに來たんだから」と考へた。「もうちやんと腹癩はらぢせをしてゐるに違ひない。」一人の百姓がコルドヴに闘牛のあることを告げ知らせた、私の血は沸騰しはじめた。而して私は狂人の如くその市へ驅けつけて、その市場へ行つて見たルカスは私に指ゆびさし示された。而して私は、柵せきに近き腰掛せんかの上にカルメンを認めた。女を一瞥ひとみしただけでも、女に眞相を確信せしむるに十分であつた。ルカスは第一の牡牛が現はれ

ると共に、私の豫知した通り氣障な眞似をし始めた。あいつは牡牛から前立のリホンを引きむしつて、カルメンの處へ持つて來た。それをカルメンが直ぐに髪の毛につけた。牡牛は私に代つてあいつに復讐してくれた。ルスカは馬がのめつた爲めに顛覆つた。而して牡牛が二人の上へのぼつた。私はカルメンを見やつた。あの女はもはや其席にゐなかつた。私のゐた場所を立去ると云ふことは、私にとつて不可能であつた。而して私は、その觀物の濟んでしまふまで待たされた。それから私は、貴方の御存じの例の家へ行つて、その晩遅くまで待つてゐた。二時頃にカルメンは歸つた。而して、私を見て少しく驚いた。

「俺と一緒にお出で」と私は女に言つた。

「ええ、行きませう」と女は答へた。

「私は馬を連れて來て、女を私の背に乗せ、その夜の明けきるまで一口も利かないで行つた夜明けのとき私共は、ある小さな僧庵に近い、寂しい宿屋の前に立ち止まつた。そこで私はカルメンに言つた——

「聽いて呉れ。俺は何にも忘れてしまふ。濟んだ事に就いちや何にも言ふまい。たつた一

つ約束してくれ——俺と一緒に亞米利加へ行つて、おまなく暮すと云ふことを。」

「いいえ」と女は慳貪な調子で答へた。「私は亞米利加なんぞへ行きたくないわ、こちらにゐてちつとも悪くはないんだから。」

「それや、お前はルカスの近所にあるからだ。ところであいつが治つたつて、其儘にして置かれないんだからな。しかし、あいつを咎める謂はない。俺はもうお前の情夫を殺しくたびれた。俺が殺すのはお前だらうよ！」

「女はその殘忍な目でじつと私を見た。而して言つた——

「私はいつも、貴方が私を殺すだらうと思つてゐた。初めて逢つたとき、その前に私は戸口の處で僧侶に會つた。私達がコルドヴを立つたあの晩に、貴方はなんにも見なかつたの？ 野兎が貴方の馬の脚の間を通りぬけた、ちゃんときまつてゐるんだから！」

「カルメンシタ、お前はもう俺に情愛をもてないか？」と私は尋ねた。

「女は何の答もしなかつた。女は足を重ねて、葦蓆の上に坐つて、指で地に物をかいてゐた。」

「ねえ、カルメン、遺方を變へて暮らさうよ」と私は訴へるやうな調子で言つた。「何處かへ行つていつまでも一緒に暮らさうよ。お前も知つてる通り、直ぐ近所の櫛の木の下には百二十オンスの金がある。それからまたあの猶太人のベン・ホセフの手にも預けてあるんだ。」

「女は微笑しながら言つた——

「私がお先きへ、それから貴方と。さうなるものと知れ切つてゐるんだわ。」

「もう一度考へ直してくれ」と私は續けた。「俺はもう我慢の出来る丈けをしてゐる。決心をしる、それでなければ俺が決心をする。」

「私は、女を残して置いて僧庵の方へ歩いた。私は隱遁僧の祈禱して居るのを見出した。私はその祈禱の濟むまで待つた。私も祈禱したかつたけれど出来なかつた。その僧の起ち上つたとき、私は僧の處へ近寄つた。」

「御上人様」と私は言つた。「貴方は危難に臨んでゐる者の爲めに、御祈りを上げて下さいませうか？」

「私は誰でも、苦んでゐる者の爲めに祈つてやる」とその僧が言つた。

「程なく神様の前に出るやうな魂の爲めに、御經を上げて戴けませうか？」

「宜しい」と僧は私を見つめながら答へた。

「而して私の様子にただならぬものがあつたので、僧は私に物語らせやうと試みた。

「私は前に、お前さんを見たことがあるやうに思ふが」と僧は言つた。

「私は僧の腰掛臺の上に一枚の銀貨を置いた。」

「いつ頃御經を上げて戴けませうか？」と私はきいた。

「半時はんときもたつたならば、宿屋の息子さんが追付け手傳ひに見えるだらう。時に、お若いのお前さんは何か良心を苦めるやうな事があるのぢやないか？ お前さんは基督者の勸言を受入れてくれるか？」

「私は今にも泣き出しさうな心持になつた。私は再び來ると云ふことを告げて置いて、急いでそこを立ち去つた。私は鈴の鳴り響くまで、草の上に寢轉んでゐた。それから私は引き返したけれど、禮拜堂の内へ入らなかつた。御經の濟んだとき私は宿へ歸つた。私はカ

ルメンが逃げてゐてくれればいいと願つた——あの女が私の馬に乗つて逃げ去つてくれたらばさ——然るに女はやつぱりそこにゐた。女は、私を恐れたと言はれなくなつたのである。私のゐないとき、女はその着物の縁を引裂いて鉛を取出した。さて、その鉛を融いて水盆の中へ投げ込んだばかりのを、卓の傍に立ちながら見守つてゐた。女はその妖術に氣を取られたので、私の歸つたのを直ぐには心付かないであつた。まづ女は鉛の一片を取上げて、陰鬱な様子を以てそれを各の方向へむけた。それからドン・ヘドロの情婦マリア・パデイラに訴へる魔法の歌を一つ唄つた。マリア・パデイラはバリ・クライサ即ちザブシイの大女王であつたと云ふことです。

「カルメン」は私は言つた、「お前は俺の行く處へ行つてくれるか？」

「女は起つてその盆を衝きのけた。而して出掛けやうとするかの如く、その頭にエエルをかけた。私の馬が引出され、女が私の背に乗つて、而して二人は出で立つた。

「ちや、カルメン」とどれ丈けか進んでから私は言つた、「お前は俺について行く氣だね？」

「死ぬまででもついて行きますよ。けども、一緒に暮すことはもうよませう。」

「私共は物寂しい山峽へ入つてゐた。私は馬を引き留めた。」

「此處ですか？」と女は言つた。

「而して一跳びに女は下りた。女はそのエエルを脱して、それを足下に落し、片手を腰に當ててちつと私の顔を見入りながら、身動きもせず突立つた。

「貴方は私を殺す氣ですね。私にはちやんと分つてる」と女が言つた。「それはきまつた事です。けれど貴方の言ふ通りにはなれませんからなれ。」

「頼むから、無暗な事を言はないでくれ」と私は女に言つた。「ねう、過ぎ去つた事はどうでもいい。が、お前も知つてる通り、俺を持崩したものはお前だ。俺が盗賊になり人殺になつたのもお前の爲めだ。カルメン！　カルメン！　お前を助けさしてくれ、お前と一緒に俺の身も助けさしてくれ！」

「ホセさん」と女は答へた、「貴方のは出来ない相談と云ふものよ。私はもう貴方の愛情を有つてない。それに貴方は、やつぱり私を思つてる。だから貴方は私を殺さうと云ふのさ。私が貴方を誤覚化するのには造作もない事です。けども、私はそんな面倒な事をしたくない。」

私達の間には、すつかり片が附いちやつた。私の良人として、貴方には貴方の妻を殺す権利がある。けれどもカルメンは、いつも自由の身でゐなくちやならない。ツプシイとして生れたカルメンは、やつぱりツプシイとして死ぬんです。」

「ぢや、お前はルカに惚れてるのか？」と私は尋ねた。

「ええ、一時は惚れてゐましたよ、貴方に惚れてゐたやうに——もつとも、貴方に惚れてゐたほどはなかつたでせうが。今は誰にも惚れてない。貴方に惚れてゐたかと思ふと、自分で自分が愛憎が盡きた。」

「私は女の足下に身を投げ、女の手を取り、涙を以てそれを濡らした。私は女に、私共の一緒に過したる、色々の楽しい瞬間を想ひ起させた。『私は女を悦ばすために、やつぱり路盗をつづけやうと申出た。あらゆる条件を。あらゆる条件をです、女が私を再び愛してくれるならば、あらゆる条件を、持出しました。』

女は私に言った——

「二度と貴方に情愛を持つことは出来ない。私は貴方と一緒に暮らしたくないんです。」

「狂暴が私を虜にした。私は小刀のさやを拂つた。私は女が、恐怖して憐れを乞ふてくれるのを希望したのです。けれども、あの女は悪魔であつた。」

「もう一度きくが」と私は叫んだ。「どうしても、私の云ふ通りになつてくれないか？」

「否です！ 否です！」と女は「地面を踏みつけながら答へた。」

「而して女は、私の與へた指環を指から脱し、それを下生の中に投げすてた。」

私は二突女を突いた。それは「一目」の小刀で、私自身のな壊してから所持してゐたのです。女は二度目をやられて、音をも立てずぶつ倒れた。私は今でも、あの女の大きな黒い目が私を見つめてゐるやうに思ふ。そのときあの目は臆になつて閉ぢられた。私は長い間茫然として、その死骸の傍に留まつた。そのとき私は、カルメンが屢々、森の中に埋められたと言つたことを想起した。私は自分の小刀で墓を掘り、その中に女を横へた。長い間女の指環を探し、やつとの事で見出した。私はそれを、女と一緒に墓の中に置いた。小さな十字架をも置いた。恐らく、私のしたことは悪かつたかも知れない。それから私は馬に飛び乗り、コルドグへ駆け附けて、最寄りの守衛所へ自首して出た。私は自分でカル

メンを殺したと言つた。けれども、何處にあの女の死骸があるかを告げることが拒んだ、あの隠遁僧は殊勝な人であつた。あの僧は、女の爲めに祈禱した！ あの女の魂を安んずる爲めに御經を上げて呉れた。可哀想に！ 罪はあの女をあんな具合そだに育て上げたツブシイの上にあるのです。」

〔譯者曰く——此譯は主としてリトウル・フレンチ・マスタビイセスの英譯により、傍らアロウ・ライブラリーの英譯をも参照しました。お仕舞についてある附録のやうな一節は、直接本筋に関係もないから、かたがた省略することに致しました。〕

——生田長江——

大正三年八月五日 印
大正三年八月十日 發
行 刷



注意

エッセンスセリース
▲編輯事務は青年學藝社宛
▲發賣事務は福岡書店宛
御用會社下へ候

<i>Essence Series.</i>		<input type="checkbox"/> 買價金拾錢
著者	生田長江	<input type="checkbox"/> 郵税金二錢
發行者	福岡新三	
印刷者	岡部鎮	
印刷所	勸文社印刷所	
發行所	青年學藝社	
發賣所	福岡書店	

東京府下田端四百五十七番地
東京市神田區連雀町十八番地
東京市淺草區森田町五番地
東京市淺草區森田町五番地
東京市神田區連雀町十八番地
代表者 文學士 蘇武利三郎
振替口座一九〇四四番

世界
學藝

エッセンスシリーズ 次目

× 每篇 博士、學士、大家執筆

每篇實價金十錢 郵税二錢
×印ハ倍刊ニ付實價倍額

× 1

2 生ゲ 田一 長テ 編作 フ ア ウ ス ト

3

3 生ダ 田ヌ 長ツ 江イ 編作 死 の 勝 利

4

4 生ホ 田一 長マ 江一 編作 イ リ ア ッ ド

5

5 森イ 田ブ 草セ 平ン 編作 鴨

6

6 加 藤 朝 鳥 編 ル ッ ソ ー 懺 悔 錄

7

7 小シ 宮ニ 豐ツ 隆ラ 編作 ア ナ ト ー ル

214
960

29	トルストイ翁遺稿 小林愛雄譯	生き た死骸 <small>かた</small>
30	バナード、シヨオ 伊藤野枝子編	ウオーレン夫人の職業
31	アンデルセン 中村古峽編	即興詩人
32	ハウプトマン 森田草平編	寂しき人々
33	オイケン博士 竹内楠三編	哲學入門
34	生田長江譯	アリストオテレス詩學
35	中村古峽編	海の夫人

右の外六十餘篇は諸大家分擔目下翻譯執筆中に付
脱稿次第陸續發刊可仕候

終

